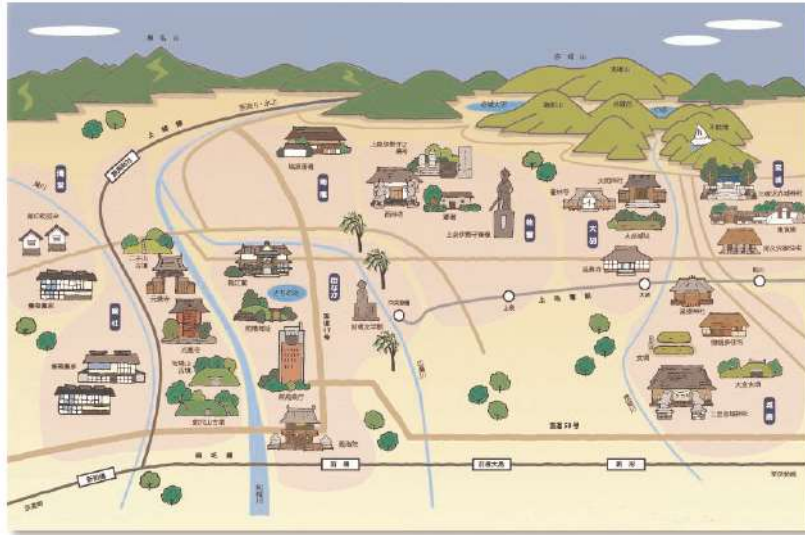


第2章

維持向上すべき歴史的風致

前橋市における歴史的風致の考え方

本市の歴史まちづくりのベースである「歴史文化遺産の活用」の取り組みでは、平成 25～28 年度（2013～2016）にかけて、2 期に渡る「歴史文化遺産活用委員会」が設置された。その委員会活動の一つとして、市内に存在する歴史文化遺産の中で、「最初・一番・唯一」に該当するものを発掘する「オンリーワン型歴史文化遺産調査」が行われた。市内の歴史的風致の設定に際しては、まず、この調査結果を基本にすることとした。

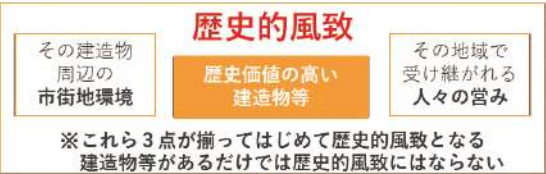


第 2 期歴史文化遺産活用委員会提言書「歴史空間マップ」

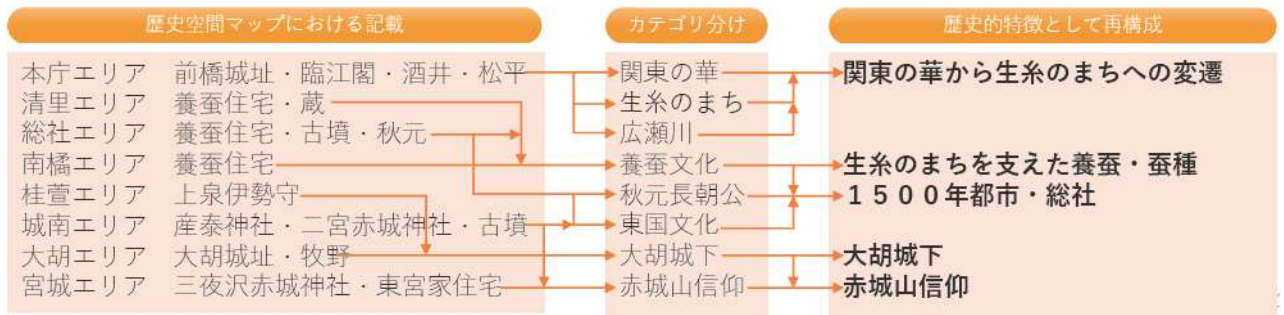
一方、歴まち法では、歴史的風致の適用要件として、「歴史上価値の高い建造物があること」、「その建造物と一体となって形成された市街地（街並み）があること」、「その建造物と関りのある活動（営み）が行われていること」、の 3 点が示されている。つまり、歴史的建造物が存在しているだけでは歴史的風致とはみなされない。

そこでまず、上記のオンリーワン型歴史文化遺産調査を基に、本市を象徴する歴史観でカテゴリ分けを行った。次に、指定・登録文化財のほか、歴史性のある建造物や伝統行事をすべてピックアップし、オンリーワン型歴史文化遺産と組み合わせ、歴史的風致の 3 要件に適合する「まとまり」を検討した。その結果、浮かび上がったまとまり＝歴史的特徴を本市の歴史的風致として定義した。

①上記のマップに記載された歴史的資源をベースに前橋を象徴する歴史・地域特性でカテゴリ分け



②各カテゴリに関して、歴史的風致 3 点セットの有無を考慮し、前橋を象徴する歴史的特徴として再構成

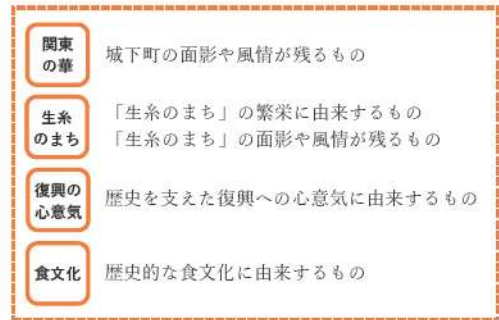


I 「関東の華」から「生糸のまち」への変遷にみる歴史的風致

【街なかにおける歴史的風致の概要】

現在の暮らしにつながる本市の歴史を紐解くと、

- ① 「関東の華」が前橋の誇りを生み、育んできた
- ② 誇りを取り戻すために城再建を目指した
- ③ 養蚕・製糸を支えた商人、町人の力で城を再建した
- ④ 城が再建されたから藩を復興することができた
- ⑤ 城を再建した想いが県都の誕生を導いた
- ⑥ 「生糸のまち」の経済力と意識が県都の繁栄をもたらした
- ⑦ 県都としての誇りがあったからこそ戦後復興も迅速だった



というロジックが成立する。つまり、本市の歴史を大局的に俯瞰すると、各時代の相関性が極めて強く、歴史が複層的に折り重なっていることが分かる。

また、本市の中心市街地と称されるエリアに関しては、すでに都市化が進んでおり、大型の歴史的資源としては臨江閣や前橋城の土塁、寺社、教会が見られる程度であるが、落ち着きと風格のある街並みは「前橋らしい」と評されることが多い。実際にまちを歩くと、城下町の面影や「生糸のまち」の風情、復興に尽力した先人たちの足跡等が至る所に点在していることに気づく。

そこでまず、中心市街地エリアにみられる前橋らしさがどこからくるのか、歴史的風致の定義からその源泉に迫ることとした。この際、本市の歴史は各時代の相関性が強いという事実を考慮し、一般的な事例にみられる「特定の時代を背景とする歴史的風致」ではなく、「江戸初期から近現代までの変遷」という大きな時間的な流れを捉えた歴史的風致とした。さらに、各歴史的風致を構成する要素を上記カコミのアイコンで表示した。

区分	主なできごと
関東の華の誇り	1603 前橋藩成立「汝に関東の華をとらす」、譜代筆頭・酒井雅楽頭家が藩主を務める 「前橋の誇り」の始まり 、9代150年の統治で関東の華にふさわしい15万石の城下町へ
	1749 度重なる利根川の城地内への浸食、酒井家の転封、名門・松平大和守家の入封
	1767 松平家川越へ転封、 前橋城取り壊し（第一の危機） ・川越藩の分領・陣屋支配（1769） 藩主不在の時代に突入、屈辱の意識から復興を目指す歩みが始まる
屈辱の意識からの復興 ～誇りを取り戻す軌跡～	1817 川越藩主8代齊典へ帰城嘆願書提出、11代直克が幕府へ再築内願書提出（1861）
	1867 100年ぶりに 前橋城再築・藩復興 、しかし半年後に大政奉還・王政復古の大号令
	1870 日本初の器械製糸を導入した藩営前橋製糸所が開設
	1871 廃藩置県の布告（第二の危機） 、第一次群馬県成立・県庁は高崎へ 再び都市消滅の危機、「前橋の誇り」を取り戻すための運動＝県庁誘致を開始
県都の繁栄 ～県都前橋生糸の市～	1881 前橋二十五人衆らの活躍により 県庁を前橋に決定する太政官布告 が発出される
	1885 臨江閣本館落成、初代利根橋架橋・線路を現在の前橋駅まで引き込み
	1892 市制施行、多大な功績を挙げた生糸商・下村善太郎が初代市長に就任
	1910 臨江閣別館落成、一府十四県連合共進会開催「昼夜空前のにぎわい」の報道 廃城の屈辱から140年、 失われた誇りを「県都の誇り」として取り戻した 1945 前橋空襲（第三の危機） ・市街地の8割が焼失、再び都市再建へ
焦土から水と緑と詩のまちへ	1948 復興祭（後に前橋まつりに改称）
	1950 前橋駅前通りにけやきを植樹、全国に先駆けて 戦災復興完了 （1953）
	1982 前橋市市民憲章制定、 水と緑と詩のまちとしての歩みをスタート

作成中

1 街なかの伝統祭礼にみる歴史的風致



(1) 街なか伝統祭礼の概要

酒井氏が藩主を務めた 150 年間（1603～1749）に前橋の城下町は大いに栄え、^{ほんまち}本町・^{れんじやくちよう}連雀町・^{たつまち}豎町は多くの人が行き交う前橋の^{ほんどう}本道であったという。その後、藩主不在の 100 年（1767～1867）の間に城下町は著しく衰退したものの、幕末に藩主松平氏の帰城が決定すると、藩士らも続々と前橋へ戻り、城の南に屋敷が割り当てられた結果、城下町は酒井氏時代の 3 倍の規模となった。間もなく明治維新を迎え、県都となった前橋の発展は著しく、製糸業の隆盛も相まって、それまで人家まばらな脇道であった^{よこやま}横山町・^{こんやまち}紺屋町・^{えのきまち}榎町が前橋の「花まち^{さんかちよう}三ヶ町」と呼ばれる賑わいを呈していった。（出典：昭和 56 年（1981）「我がふるさと」）

明治 40 年（1907）の「前橋繁昌記」によると、当時の中心商店街一帯には八幡宮・連雀町八坂神社・横山町八坂神社・東照宮・雷電神社・熊野神社・神明社（神明宮）など、数多くの神社があった。このうち連雀町八坂神社は、城下町時代の中心地であった連雀町の鎮守で、初代藩主の時代に始まったと伝わる「^{はついち}初市（だるま市）」を司る市神が祀られているうえ、夏の^{てんのう}天王まつりは前橋随一の大祭典である「^{あまのい}祇園祭礼」として名を馳せた。一方、横山町八坂神社は、明治に入ってから栄えた花まち三ヶ町の鎮守で、明治 31 年（1898）の境内拡張を契機に、当時の^{かりやうかい}花柳界で信仰を集めた「^{とりいち}酉の市」を始めることとなった。そのほかの各神社では、秋の例祭にて神輿を奉じて町を練り歩くのが恒例であったとされる。こうして、正月の初市、夏の祇園祭礼、秋の神輿渡御、年の瀬の酉の市は、前橋の四季を彩る風物詩として多くの人でにぎわった。

その後の紆余曲折を経て、現在、初市は本市の年中行事である「初市まつり」として受け継がれ、酉の市は地元商店街により「^{おおとりさい}大酉祭」として継承されているが、祇園祭礼と各神社の神輿渡御は、昭和 20 年（1945）の前橋空襲でいったん途絶えている。しかし、戦後復興を目的に始められた「復興祭」が「前橋まつり」に名称変更となった昭和 34 年（1959）、市民からの強い要望により、祇園祭礼と神輿渡御の一部が前橋まつりのプログラムに組み込まれることとなった。

そこで本節では、本市の年中行事である「初市まつり」と「前橋まつり」のルーツについて述べていく。

(2) 関連する建造物

【街なかの伝統祭礼を構成する建造物】

①前橋八幡宮の社殿

八幡宮の社伝によると、貞観年間（859～877）に創建し、^{ありわらのなりひら}在原業平の子孫と言われる^{ながのなりしげ}長野業重が京都の^{いwashimizu}石清水八幡宮から勧請したとされる。一方、社殿が国府のある西へ向けられていることから、^{とうごくげんじ}東国源氏発祥以前の^{こうずけこくぞ}上野国府八幡宮とする説もある。祭神には、^{おろしん}応神天皇、^{ひめのおおかみ}比売大神、^{じんこうこうごう}神功皇后が祀られ、本殿には^{いちがみ}市神を祀る^{やきか}八坂神社が合祀されている。



八幡宮の拝殿
左：昭和 42 年（1967）八幡宮提供 右：現在

1 料亭、芸者屋、遊女屋が集積した歓楽街のこと。

戦国時代には、歴代城主が八幡宮に厚い崇敬を寄せたことから、庶民もこれに倣い、やがて前橋の総鎮守となった。なお、元亀2年(1571)、時の城主であった北条高定・高広親子は、八幡宮に土地の寄進状・諸役免許状を送るが、その文面に「当地厩橋八幡宮」と書かれており、これが前橋の地名の語源となる「厩橋」が明記された最古の資料となっている。

社殿は昭和20年(1945)の前橋空襲によって焼失、現在の拝殿は昭和30年(1955)、本殿は昭和50年(1975)にそれぞれ再建された。棟札等はないが、昭和42年(1967)の写真に現在の拝殿の姿が写っている。境内には、明治黎明期に生糸商らが奉納した石灯籠や、昭和40年(1965)に地元の時計商が奉納した鳥居、令和2年(2020)に前橋市景観資産に登録された樹齢800年とみられる幹周6m超のイチョウなどがある。

②熊野神社の鳥居

熊野神社の社伝によると、創建は不詳であるが出雲国八束熊野(島根県松江市八雲村熊野)より分社、勧請されたという。古来この地は、鬱蒼とした木立に囲まれた神域で「熊野の森」と呼ばれていたが、江戸時代以降、町の発展とともに現在のような神社形態になったと考えられている。

昭和20年(1945)の前橋空襲で社殿は焼失したが、氏子の熱意により昭和36年(1961)に再建され、その際に奉納された現在の鳥居には「昭和三十六年四月吉日」と刻印されている。なお、戦後再建された社殿は平成4年(1992)に台風により被害を受けたため、大規模改修を行っている。

祭神は櫛御氣野命で、古くから神社の使者として八咫鳥が祀られており、三つの鳥の足跡が刻まれた古い礎石は「三ツ足八咫鳥石」と呼ばれる。

日本サッカー協会のシンボルマークが八咫鳥をモチーフとしていることから、近年ではプロサッカーチームが必勝祈願を行ったり、サポーターが参拝に訪れることが多くなっている。

主な年中行事には、横山町(現在の千代田町四丁目)の八坂神社から継承された大酉祭(酉の市)がある。当日は、熊手や縁起物の露店が建ち並ぶほか、この日に限り、願いを書き込んだ手ぬぐいで八咫鳥石を拭う「御神拭」と呼ばれる願掛けを行うことができる。



熊野神社の鳥居

③神明宮

神明宮の社伝によると、この地は古くから神明山と呼ばれ、伊勢神宮(三重県)を祀る社であったが、文明10年(1478)、江戸城を手掛けた太田道灌により、前橋城の鬼門除けとして社殿が建立されたという。

祭神は大日靈命(天照大御神)で、境内には神明宮のほか、稲荷神社や菅原神社、巖島神社などがある。



神明宮拝殿



遷宮の銘札

境内は、伊勢神宮を模した内宮と外宮の構造となっており、神明社(内宮)と稲荷社(外宮)のそれぞれに参道がある。また、明治期までは伊勢神宮と同様に数十年に一度の遷宮

(建て替え)が行われており、神明宮は文政5年(1822)、稲荷神社は明治23年(1890)に遷宮したことが、それぞれの本殿に保管された木札に記されている。

【伝統祭礼の舞台となる街並みを構成する建造物】

④大蓮寺の地藏尊

大蓮寺の寺伝によると、永正2年(1505)に前橋城の鬼門に当たる柳原(大手町三丁目)にて創建、利根川畔の「虎ヶ淵」に近い場所であったことから山号を虎淵山としたとされる。江戸時代に入ると、初代藩主・酒井重忠は利根川の氾濫が堂宇を危険にさらしたため現在地へ移転することとし、決壊防止を祈念して元和2年(1616)に水の神である弁財天を祀った。



大蓮寺の地藏尊

現在、境内にみられる地藏尊は、「旅稼ぎ」で知られる信濃国高遠(長野県伊那市高遠町)の石工集団「高遠石工」によるものとみられ、台座には文政9年(1826)、宮下政吉の文字が刻まれている。住職によれば、かつては参道の入り口に石灯籠と対で設置され、長らく門前のシンボルとして親しまれたが、昭和20年(1945)の前橋空襲により境内の建物がすべて焼失、焼け残った地藏尊は昭和48年(1973)に現在地に移されたという。なお、本堂は昭和51年(1976)に再建されたものである。

⑤弁天通りアーケード

高度成長期、全国の商店街でアーケード設置がブームとなり、本市の中心商店街でも昭和36年(1961)の立川町通りを皮切りに、中央通り、弁天通り、オリオン通りにアーケードが設置されていった。弁天通りのアーケードは、柱のプレートによると昭和43年(1968)に設置され、大蓮寺を避けた線形としたことから曲がりくねった特徴的な形状となっている。後年、他のアーケードは設備の老朽化に伴い建て替えが進んだが、弁天通りのアーケードは当時の姿を残している。



弁天通りアーケード

弁天通りはもともと、立川町通りから大蓮寺までの参道で、参道の先に弁財天が祀られていたことから、周辺の街並みが弁天通りと称されるようになったものである。時代が進み、この辺り一帯が商業地として活性化すると、弁天通りも参道から商店街へと姿を変えていった。

弁天通り商店街は、広瀬川を渡って中心商店街へ至る北側の玄関口にあたり、かつて製糸工場や擦糸工場が林立した住吉町や若宮町とつながる動線上にもあることから、製糸業最盛期にはかなりの通行量を誇ったという。現在、中心商店街の空洞化によって通りの店舗も人通りも激減したが、昭和レトロを感じさせる街並みと、奥にどこまでも続いてみえる特徴的な形状から、映画やドラマ、CMのロケが頻繁に行われており、令和2年(2020)には前橋市景観資産に登録されている。また、弁天通りの中ほどから東へ抜ける小路地は、戦後復興の一環で整備された「呑龍仲店」と呼ばれる長屋横丁へ続いており、こちらも弁天通りと同様に昭和レトロの雰囲気が色濃く漂っている。

⑥臨江閣

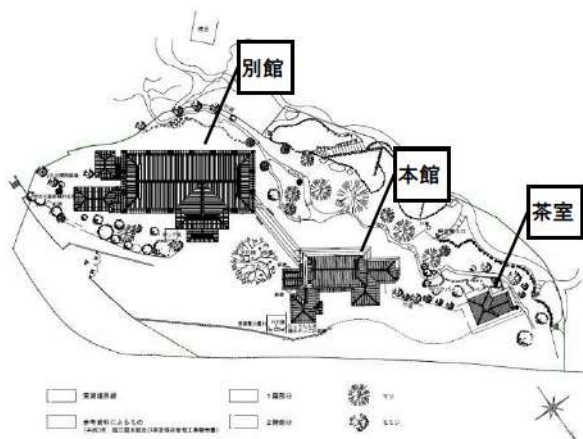
臨江閣は本市を代表する明治期の木造建築群で、命名は初代群馬県令・楢取素彦による。本館・茶室・別館からなり、平成30年(2018)に国の重要文化財に指定された。建物の全体配置としては、これら3棟の建造物と庭園によりなる。本館は敷地のほぼ中央北寄り、茶室は更に北側に位置し、東側南寄りの敷地に置かれた別館と共に、それぞれ西側への眺望を妨げないように工夫しながら配置されている。

本館は、前橋への県庁移転に際して迎賓館の無いことを憂えた楢取素彦の勧めで、地元有志や企業の醵金により明治17年(1884)に建設された。近世から近代へという急激な社会変化、欧米化の流れの中で、前代の技術を踏襲した日本古来の技術と伝統様式を用いた和風建造物である。明治26年(1893)の明治天皇の行幸にて行在所として使われたのをはじめ、明治35年(1902)と明治41年(1908)には大正天皇(当時は皇太子)が滞在された。戦災に伴い、昭和20年(1945)から9年間は本市の仮庁舎として使用された。

茶室は、本館の建設に係る費用の大半が醵金によって賄われたという前橋市民の心意気に感動した楢取素彦や県庁職員による募金により、本館と同年に建設された。建築は、後に北大路魯山人も関わる星岡茶寮を手掛けた大工である今井源兵衛の手による。茶席は、京間4畳半・本勝手・下座に床の間を持つ形式で、「わび」に徹して草庵茶室を守った金森宗和の流れを汲むと言われる。

別館は、明治43年(1910)の一府十四県連合共進会に先立ち、貴賓館として建設された。2階には180畳の大広間があり、建築用材には中山道安中宿の杉並木の巨木30本が使用され、大広間の周囲に柱目が美しく並び、今も大屋根を支えている。共進会閉会後は本市に引き渡され、群馬を代表する唯一の大公会堂として利用された。

これら3棟の相乗効果により歴史的建造物群としての価値を生み出している臨江閣は、幕末から明治初期に活況を呈した製糸業を背景とした市民力の象徴であり、当時の前橋の隆盛を伝える建物である。



配置図(『臨江閣』保存管理計画書より)



本館



別館



茶室



臨江閣と日本庭園

⑦前橋城跡

度重なる利根川の氾濫により、江戸時代中期に前橋城は廃城となったが、慶応3年（1867）に再築され、明治に入ってから本丸御殿が群馬県庁舎として使用されるようになった。以降、かつての城内が官庁街・住宅街へと変貌していく中で城の遺構は徐々に失われていったが、現在も群馬県庁と前橋公園の土塁や風呂川の一部に面影が残る。

県庁脇の土塁の上にある「前橋城址之碑」は、城を再築した当時の藩主・松平直克の功績を称えて明治41年（1908）に建立されたもので、篆額（石碑に刻まれる表題）は直克の長男である松平直之（伯爵）、撰文は重野安鐸、書は日下部東作による。



前橋城址之碑

⑧前橋城 車橋門跡

前橋城の数少ない遺構の一つで、城の外曲輪から金井曲輪を結ぶ大手筋にあった重要な門の跡である。酒井氏4代忠清（寛永14年（1637）～天和元年（1681））の時代に、2本の柱の上に横木を1本置いた冠木門から、櫓の2階を通して門の左右に渡れる渡櫓門に改築され、酒井氏の後を継いだ松平氏が川越へ移封した後もこの門は存続した。

現在見られる門の跡は、昭和39年（1964）に市の史跡に指定されているが、同年の区画整理事業により間隔が狭められ、西側の台石が8m移動した状態となっている。なお、近隣の民間建物の地下には、車橋門の地下石積が保存されている。



前橋城車橋門跡

⑨前橋城 大手門跡

城の玄関口となる大手門から伸びる橋のたもとにあった石垣で、酒井氏時代の遺構と推定される。車橋門の台石よりも大きく、表面を加工して隙間なく積んだ切込接になっている。令和3年（2021）の民間再開発事業に際し、地表から1.5m下で発見された。

いったんは埋め戻されたが、市民から見える形での保存を要望する声が多く寄せられたことを受け、事業者の厚意により、後年の公開を前提とした施工が行われることになった。



前橋城大手門跡

⑩ 妙安寺

妙安寺の寺伝によると、親鸞聖人の高弟・成然によって下総国猿島（現在の茨城県西部）に創建され、酒井重忠の招請により川越に移った後、慶長6年（1601）の重忠の厩橋城入城に伴い厩橋に移転したとされる。妙安寺には、親鸞聖人が自作した木像があったが、徳川家康からの求めに応じて京都の東本願寺の創建にあたり移された。これが縁となり、妙安寺は家康から葵紋免許を得て数多くの宝物が贈られるとともに、親鸞聖人像の「御里御坊」と呼ばれるようになり、東本願寺からも特別の格式を与えられた。



妙安寺の梵鐘

同寺由来の文化財は多数にのぼるが、ほとんどは群馬県立歴史博物館に保管されており、現地で見ることができるのは、15世紀ごろに鑄造されたとみられる「梵鐘」（県指定の重要文化財・昭和30年（1955））だけとなっている。

なお、本堂は昭和20年（1945）の前橋空襲で焼失し、昭和22年（1947）に再建されたことが、現在の本堂内部の柱の墨書きによって記されている。

⑪ 源英寺

源英寺の寺伝によると、元和2年（1616）頃に前橋城の鬼門除けとして酒井重忠が創建した寺で、山号の「柳原山」は、寺の所在地がかつて柳原という地名であったことに由来するとされる。

寺宝である「酒井重忠画像」は、同寺に残る酒井重忠画像口伝書・由来書によれば、創建と同年に重忠が自筆したものとされる。昭和20年（1945）の前橋空襲では、防空壕に入れて罹災を免れ、昭和48年（1973）に市の重要文化財に指定された。



酒井重忠画像

現在の本堂は令和元年（2019）に大規模改修を行っているが、それ以前には昭和28年（1953）に本堂山門屋根葺替工事、昭和46年（1971）に本堂修築工事が行われたことを示す芳名板が本堂内部に残されている。なお、建物の主要構造部は山号額に刻まれた寛政10年（1798）のものと推定されている。

⑫ 龍海院

龍海院の寺伝によると、酒井重忠の移封に伴い、菩提寺である同寺も慶長6年（1601）に川越から厩橋へ移設された。当初は市内の岩神村にあったが、火災によって現在地に移ったという。寛延2年（1749）、酒井氏は9代忠恭の時代に姫路へ移封となるが、同寺は本市に留まり、その後も菩提寺であり続けた。

文政4年（1821）に火災に遭い、文政年間（1818～1830）に大規模な伽藍再興等の整備が行われ、現存する本堂は文政12年（1829）、御霊屋は



龍海院の本堂

同 10 年（1827）に建立されたことが棟札からわかっている。山門（中門）は棟札によれば天保12年（1841）に上棟したこととなっているが、様式手法からみてその時代よりも前に作られたものと考えられている。

境内には、初代から 15 代まで歴代藩主の墓石が建ち並ぶ広大な墓所（前橋藩主酒井氏歴代墓地）があり、昭和 39 年（1964）に本市第 1 号となる市の史跡に指定された。なお、墓域内には酒井氏の分家で、伊勢崎藩主の初代と 6 代の墓もあるほか、一般墓地内には初代市長下村善太郎の墓がある。



酒井氏歴代墓地

⑬ 長昌寺

長昌寺の寺伝によると、延徳元年（1489）、厩橋城中の老松の下に草堂を設け、城主の長野方業の持仏である阿弥陀三尊を安置して本尊としたのが始まりと伝わる。天正 10 年（1582）、織田信長の四天王・滝川一益が厩橋城主になった際、近隣の諸将を招いて長昌寺の境内にて本格的な能興行を行った。演目は「玉鬘」で、これが記録に残る群馬県で最初の演能とされる。



長昌寺の本堂

現在の本堂は昭和 42 年（1967）に再建されたもので、棟札等はないが当時の写真が残されている。

⑭ 上毛倉庫

社史によれば、上毛倉庫株式会社は旧第三十九国立銀行の役員らの出資により明治 28 年（1895）に設立された。定款に「繭糸及其ノ他貨物ヲ頼り、之ヲ保管シ及ビ貸庫ノ業を目的トス」とあるように、繭糸を保管するために造られた倉庫業の会社である。同年、前橋駅前（表町二丁目）に 3 棟のレンガ倉庫を建設し、そのうち 2 棟が現存している（出典：前橋市景観重要建造物悉皆調査・平成 26 年（2014））。構造は、堅牢なイギリス積みの三重レンガ壁で、出入口と窓は鉄扉、窓の内側には盗難防止



上毛倉庫

の鉄格子がはめられている。当時、事務所内には前橋商業会議所（現在の前橋商工会議所）の前身である前橋商議会が置かれ、養蚕家と製糸家との仲介機能を担った。

大正 6 年（1917）には現在の若宮町一丁目にも倉庫を建設したが、後年取り壊され、現存するのは表町二丁目の 2 棟のみで、現在は紙類の保管庫として営業を継続している。

⑮ 旧勝山社煉瓦蔵

旧勝山社煉瓦蔵は、明治35年（1902）に勝山社の倉庫として建造された。大正3年（1914）に群馬商業銀行に所有権が移転すると、その後、銀行の担保物件としていくつかの変遷を辿り、昭和27年（1952）に民間事業者に買い取られた。昭和48年（1973）まで同事業者の倉庫として利用され、それ以降は飲食店として活用され現在に至る。構造は焼き過ぎ煉瓦²のイギリス積みで、道路幅に伴い昭和28年（1953）に現在地に曳移転^{ひきいてん}され、昭和56年（1981）には東側に出入口が新設されている。平成20年（2008）には国の登録有形文化財に登録された。



旧勝山社煉瓦蔵

⑯ 旧安田銀行担保倉庫

旧安田銀行担保倉庫は、貸付金の担保物件（主に繭、生糸）用倉庫として大正2年（1913）に建設されたもので、市内に現存する最大のレンガ倉庫である。昭和26年（1951）に協同組合前橋商品市場に払い下げられ、隣接地で稼働していた乾繭取引所の現物倉庫として利用された。レンガ壁はイギリス積みを採用し、レンガを接着する目地は東京駅にも用いられた「覆輪目地」と呼ばれる特別な仕上げとなっている。平成16年（2004）には国の登録有形文化財、平成24年（2012）にはぐんま絹遺産、令和2年（2020）には前橋市景観資産に登録され、現在は建物の一部を貸館等に利用している。



旧安田銀行担保倉庫

⑰ 群馬県本庁舎（昭和庁舎）

初代県庁舎であった前橋城本丸御殿の老朽化に伴い建設された2代目県庁舎で、昭和3年（1928）の竣工以来、70年以上にわたり県都の顔として親しまれ、現在も貸館等で利用される現役施設である。1階は石張り、2・3階はレンガを想起させるスクラッチタイル張りで、蚕糸業県群馬の最盛期を象徴する洋風建築である。後述の群馬会館とともに、昭和20年（1945）の前橋空襲から難を逃れた稀有な建物で、平成8年（1996）に国の登録有形文化財に登録されている。



昭和庁舎

平成27年（2015）に放映されたNHK大河ドラマ「花燃ゆ」では、主人公・文の夫が後の群馬県令・楢取素彦であり、物語後半が群馬を舞台として描かれたため、昭和庁舎に大河ドラマ館が設置され、約15万人の見学客が訪れた。



本丸御殿（初代県庁舎）

² 普通の煉瓦よりも良質の粘土を、高温で焼き過ぎになるくらいに焼いた煉瓦。吸水性が少なく、摩滅に強い。

⑱群馬会館

昭和天皇の即位を記念して昭和5年(1930)に県庁前に建設された。当初は産業会館の位置付けで、1階には商品陳列所の事務室、参考品室、商品陳列室と畜産組合、信用組合が、2階には県農会、購買組合が入っていた。こうしたことから群馬会館は「産業の殿堂」と言われた。昭和58年(1983)のあかぎ国体の時に内部が改装されて公会堂となったが、外観は建設当初の姿を残したまま現在に至る。建物は重厚でクラシカルなルネサンス様式で、外壁は昭和庁舎と同様にレンガを想起させる。群馬県の近代化を象徴する建物のひとつで、こちらも平成8年(1996)に国の登録有形文化財に登録された。



群馬会館

⑲「建設と平和」像

JR前橋駅北口ロータリーの中央に佇む2体の銅像は、昭和28年(1953)に彫刻家・分部順治が制作したもので、当時、駅からけやき並木にかけて数多く設置された公共彫刻(パブリックアート)の一つである。当初は駅北口の噴水の中央にあり、男性像と女性像が衝立を挟んで背中合わせの形で設置されていたが、駅舎の高架化にあわせて平成元年(1989)にロータリーが改修された際、男性像の台座に「建設」、女性像の台座に「平和」の銘が刻まれて左右に並んで設置されるようになった。現在地には平成24年(2012)に移設されている。



現在の銅像

駅舎が高架化される以前の先代前橋駅は、昭和2年(1927)に建設された洋風木造の駅舎で、翌年に竣工した昭和庁舎、3年後に建設された群馬会館とともに、前橋を代表する洋風建築であった。長らく県都の顔・玄関口として親しまれたが、昭和61年(1986)の駅の高架化に伴い、約60年の歴史に幕を下ろした。その後、駅舎やロータリーは何度か改修工事が行われているが、工事が行われるたびに、かつての駅舎を知る世代を中心に復元を求める声が多く寄せられ、現在もそうした要望が根強く聞かれるという。



先代駅舎の時代の銅像

⑳橋林寺

橋林寺の寺伝によると、文明7年(1475)に厩橋城主・長尾景信によって厩橋城内金井曲輪に建立された。慶安3年(1650)に藩主・酒井家から寺領20石を与えられ、現在地(住吉町一丁目)に移った。天明5年(1785)、嘉永5年(1852)、文久2年(1862)と度重なる火災に見舞われながらも再興を果たしてきた。明治期には前橋積善会(慈善事業団体)の本部となり、子守をする子供たちの教育所も開設された。昭和20年(1945)の前橋空襲により寺内におけるほとんどの建物が消失した。



橋林寺の開山堂

現存する開山堂は、空襲による焼失を唯一免れた鉄筋コンクリート型枠ブロック造の建物で、「群馬県近代和風建築総合調査報告書」によれば、昭和7年(1932)に建築家・中村鎮の設計により作られたものであることがわかっている。

②① 琴平宮

創建は不詳であるが、酒井重忠が慶長6年(1601)に厩橋城に入城した際に奉幣し、以来、藩主が代々崇敬してきた神社である。文化～弘化年間(1804～1848)にかけて、旅の道中無事を司る神として親しまれ、10月の大祭には参拝の人々が列をなし、広瀬川に架かる厩橋から当社に至る道筋には多くの露店が連なり、大変なにぎやかさであったと伝わる。旧社殿は昭和20年(1945)の前橋空襲で焼失したが、境内の建立碑によれば、現在の社殿は昭和33年(1958)に再建されたとある。



琴平宮

②② 諏訪若御子神社の石灯籠

諏訪若御子神社の社伝によると、文明12年(1480)に笠間明玄入道が前橋城築城の際、西群馬郡に奉斎したのが始まりとされ、当時、この地は旧利根川の流路にあったことから、その一洲上に祀られたものと推測されている。当神社の所在地である城東町二丁目は、かつて「諏訪町」という町名であり、辺り一帯の鎮守として崇敬されていたことを示している。境内には嘉永元年(1848)の文字が刻まれた石灯籠が置かれている。社殿は昭和20年(1945)の前橋空襲で焼失し、現在の社殿は昭和31年(1956)に再建されたものである。



諏訪若御子神社の石灯籠

②③ 愛宕神社の石灯籠

愛宕神社の社伝によると、寛永7年(1630)に京都府亀岡市千歳町愛宕の宗社より分社を奉斎し鎮座したものとされる。火産霊命を祭神とし、火伏の神として厚い信仰を集めた。また、前橋城の鬼門除けとして、社殿は城から北東の方角に建てられている。元禄15年(1702)と昭和52年(1977)に再建されているが、境内の石灯籠には、文政3年(1820)の文字が刻まれている。



愛宕神社の石灯籠

②④ 永寿寺の鬼子母神堂

永寿寺の寺伝によると、寛文10年(1670)に姫路藩主・松平大和守が姫路で開基した寺で、松平氏が移封になるたびに同寺も移転した。慶応3年(1867)に前橋城が再建され、松平氏の前橋帰還が決定すると、4年後の明治4年(1871)に川越から現在地(本町三丁目)に移った。廃藩置県後、松平氏が当寺の本堂を家臣の禄配給所として使用したことから、藩士から厚く信仰されたと伝わる。



永寿寺の鬼子母神堂

境内の鬼子母神堂は、昭和15年(1940)に建てられたことが奉納額に記されている。また、松平家より拝領した前橋城の登城太鼓も現存している。

②⑤ 巖島神社の狛犬

巖島神社の祭神は市杵島姫命で、水の災いを除き幸福を招く徳のある神として、広く全国に祀られる。境内には水波能売命を祀る水天宮があるが、もともと横手町の諏訪神社に祀られていたところ、明治18年(1885)の利根橋架橋に際し、水害が出ないようにと移されたものである。境内には、昭和41年(1966)造立の狛犬が鎮座している。



巖島神社

②⑥ 前橋ハリストス正教会の二代目聖堂(旧聖堂)

前橋ハリストス正教会は、前橋に最初に入ってきたキリスト教の教派で、明治11年(1878)に士族によって設立された。翌年には、ロシア人のニコライ大主教が、藩営前橋製糸所の創立に尽力した深澤雄象らに洗礼をした記録が残っている。実際に、深澤は同教会の中心として活躍し、後に創業する研業社や精糸原社における工女の指導には、キリスト教精神が大きく影響しているとの評価がなされている。



ハリストス正教会の旧聖堂

初代の聖堂は昭和20年(1945)の前橋空襲で焼失し、二代目の聖堂(旧聖堂)が昭和47年(1972)に再建された。平成27年(2015)には新たな聖堂が建設され、内部のイコノスタス(イコンを配した壁)は新聖堂に移設されたが、旧聖堂建物はそのまま保存されている。

②⑦ 前橋聖マッテア教会

前橋聖マッテア教会は、イギリス国教会の流れをくむ聖公会の教会で、教会名の「マッテア」はキリストの十二使徒の一人マッテア(マテア)より採られたものである。

明治22年(1889)、アメリカの聖公会宣教師であるH・ジェフリー師が、北曲輪町(現・大手町)の岩上氏の住宅の一室を借り受けて開いた伝道集會が始まりとされ、2年後には教会組織が整えられた。



前橋聖マッテア教会

明治33年(1900)に現在地に礼拝堂が完成し、前橋聖マッテア教会と名付けられた。礼拝堂は昭和20年(1945)の前橋空襲で焼失し、現在の聖堂は昭和27年(1952)に再建されたことが壁面に記されている。

⑳前橋カトリック教会聖堂

前橋カトリック教会は、群馬県におけるカトリック教の最初の教会であるとともに、中心的な教会である。現在の聖堂はゴシック様式を基調とし、前橋教会最初の日本人司祭・内野作蔵の尽力によって昭和7年（1932）に建設された。正面左右に塔を立ち上げた双頭形式の構造で、尖頭アーチ、ステンドグラスを使った大きな窓を持つ。

昭和20年（1945）の前橋空襲では、尖塔の片側の屋根が焼けただけで全焼失は免れ、戦禍をくぐり抜けた貴重な建造物といえる。その建設年代やデザインが優れていることから、平成13年（2001）に国の登録有形文化財となった。



前橋カトリック教会聖堂

作成中

(3) 歴史と伝統を反映した人々の活動と周辺の市街地環境

①初市まつり

ア 初市まつりの歴史

毎年1月9日に開催される初市まつりは、国道50号の本町一丁目交差点から本町二丁目五差路まで(本町通り)の約350mを通行止めにして行われる新年の風物詩で、例年、6～8万人の人出があり、沿道に並ぶ約300店の露店の多くがダルマや縁起物を商うことから、「だるま市」とも呼ばれる。毎月4と9の日に本町通りで開かれた六斎市が起源とされ、諸説あるものの初代前橋藩主酒井重忠の時代に始まったと伝わる。

江戸時代初期、城下町では前橋城大手門にもっとも近く、前橋八幡宮の門前であった連雀町が栄えていた。連雀町には当時、「町人の祖(町人頭)」と称される木嶋助右衛門が居を構えており、助右衛門9代目の時³、藩主への願い出により本町の3か所に市を立てることを許され、翌年正月9日、初めて市を開き見世張りしたのがはじまりとされる。また、地元の言い伝えによると、「当日は、八坂神社の御神輿を奉じて市神を祀り、庶民の信仰を収め、藩侯(藩主)よりは米6俵・太刀一口・神馬一頭⁴の寄進があり、方七里に及び商工農民が集まりにぎわった。」とあり、かなり遠方からも人々が足を運んだ様子が伺える。

市は当初、食料品や生活物資などの取引が主であったが、元禄期(1688～1704)を過ぎると、後に本市の基幹産業となる生糸関連物品の取引が増えていき、農村部からは多くの養蚕家が繭を卸しにくるようになった。その後、市は生糸の取引を中心に栄え、次第に金物、日用雑貨、ダルマなどの縁起物が売られるようになったという。

当時、養蚕家の間では、蚕が繭を作るまでに4回脱皮することを「起きる」と言っていたことにかけて、「七転び八起き」のダルマは養蚕の守り神として祀られていた。また、「(ダルマの目が)猫の目に似ていてネズミを防ぐ効果がある」との評判から、製糸業最盛期の頃にはダルマが飛ぶように売れたと伝えられている。

前橋の初市が「だるま市」と呼ばれるようになった明確な経緯は定かではないが、だるま市の起こりは、文化年間(1804～1818)、藩主酒井氏の祈願所で当時前橋藩領であった少林山達磨寺(高崎市)の住職にダルマの木型を掘ってもらった豊岡村(高崎市)の村民が、これを紙の張子のダルマとして製作し人気を集めたものと言われている。豊岡村の農民2、3人がかごを背負い、前橋初市に登場したのが明治14年(1881)以前とされ、明治44年(1911)の新聞記事には「前橋名物達磨市」の記載がされていることから、本市の「生糸のまち」の歩みとの密接な関わりが推察される。



初市まつりの光景



昭和42年の初市まつり

³ 元禄3年(1688)とする説と、天和3年(1683)とする説がある。

なお、本市が発行する「広報まえばし」によれば、初市が休止となったのは戦災翌年の昭和 21 年（1946）だけで、翌昭和 22 年（1947）には再開となった。また、地元自治会が編纂した「本町のあゆみ」（平成 2 年（1990））によれば、戦災で焼失した神輿も昭和 34 年（1959）には新調されている。

イ 渡御の儀

江戸時代の市では市神を祀る神輿が奉納されたことから、現在の初市ではこれに倣い、市神が市中を巡る「渡御の儀」が行われる。渡御の儀では、市神を奉じた神輿が八幡宮を出発し、木遣りや祭主、神官などを連ねた行列が市街地を練り歩く。

行列のルートは、中心商店街を南北に貫く「千代田通り」から、明治時代に繭市場通りと称された「立川町通り」へと入り、かつて桑町通りと呼ばれたアーケード商店街である「中央通り」を抜け、国道 50 号の「本町通り」へと巡行し、終点である仮宮で「大ダルマ」と「大獅子」が行列を出迎える。

仮宮が設置される本町通りは、現在の初市のメイン会場であるが、かつては本市における生糸市場の本場で、幕末には前橋プラザ元気 21 付近に生糸の品質を藩が直接監督するための「生糸改所」が置かれ、明治に入ってからには多くの銀行が集積する金融の中心地であった。当時、沿道には大きな店構えを備えた商人屋敷が軒を連ね、荷物を積んだ馬車が連なり、商人を乗せた人力車が東西南北に行き交ったと伝わる。また、本町通りは沼田街道から江戸街道への道筋として、本陣や問屋、旅館などが立ち並び、宿場の役目も果たしていた。現在、当時の面影はほとんどみられないが、令和 2 年（2020）にコンセプトホテルとして再始動を果たした「SHIROIYA HOTEL」は、江戸時代に創業した老舗「白井屋旅館」をリノベーションしたものである。

なお、平成 14 年（2002）には、本町通りの中央アーケード南から本町二丁目五差路東交差点までの区間が、旧都市景観条例に基づく景観形成モデル地区に指定されている。



渡御の儀



生糸改所



生糸改所の碑



本町通り沿いに設置される仮宮



SHIROIYA HOTEL

ウ すまんじゅうと福おこし

初市の開催にあわせ、群馬県民の郷土食である「焼きまんじゅう」の老舗・安政4年（1857）創業の原嶋屋総本家からは、甘だれ味噌を塗って焼く前の「すまんじゅう（数万拾）」が市神に奉納される。店の伝承によれば、文久2年（1862）の初市の日、生糸改所のお披露目で横浜の商人が招待されたため、茶菓子としてすまんじゅうを供したところ、「これは縁起が良い、ひと市毎に『数万両』儲かる」と大変喜ばれたという。これを聞いた店主は、さっそく八幡宮にすまんじゅうを献じ、商売繁盛を祈願した。以来、初市の朝にはすまんじゅうを献饌し、祭典後の直会では、「冷酒の肴はすまんじゅう」という独自の風習が連綿と続いていくことになった。

また、初市のメイン会場近隣で商う明治3年（1870）創業の老舗和菓子店・御菓子司青柳本店では、土産菓子である「福おこし」を初市の当日限定で販売している。福おこしは創業当時から売り始めたものであるが、「身を起こし家を興す」との言い伝えが評判を呼び、毎年、初市まつりの朝には店舗前に長い行列がみられ、今でも当日のうちに完売する売れ行きをみせている。

現在では、初市まつり当日に、すまんじゅうと福おこしを仮宮と八幡宮へお供えするのが恒例となっている。



すまんじゅう



福おこし

エ だるま市

現在の初市は、八幡宮に隣接する八幡宮公園にて、古ダルマを供養する「お焚き上げ」から始まる。お焚き上げは、役目を果たしたお守りやダルマなどを感謝の意を込めて供養する神事で、初市における起源は定かではないが、新聞記事から昭和6年（1931）にはすでに行われていたことが分かっている。

メイン会場である国道50号には、市に見立てた露天商がずらりと軒を連ねるが、その内の4分の1程度がダルマや招き猫、熊手等の縁起物を商う。

軒先では、客が値切りを仕掛け、店主が「何百万両！何千万両！」と威勢よく返す姿があちこちで見られる。だるま市のこうした丁々発止のやりとりには、「生糸のまち」として躍進した本市最盛期の熱気が記憶されている。

なお、平成29年（2017）は、市開始400年と初代藩主・酒井重忠没後400年が重なる年であったことから、その年の初市まつりに「初市創祀400年記念」の冠を銘打ち、菩提寺・是字寺龍海院で



お焚き上げ



値切りのやりとり

作成中

の「重忠公追善法要」や、龍海院から八幡宮への「御霊行列」、太刀一口の寄進にちなんだ「刀剣鍛錬実演」などの追加行事が行われた。



追善法要



御霊行列



刀剣鍛錬実演

②前橋まつり

ア 街なかの祭礼の推移と前橋まつり

【連雀町八坂神社の祇園祭礼】

江戸時代から続く本市随一の大祭典といえ
ば、連雀町八坂神社の夏の祭礼である「祇園
祭礼」であった。当時の様子を知る手掛かり
には、宝暦3年(1753)と寛政10年

(1798)、文政11年(1828)の3本の絵巻が
あり、松平氏が川越に転封した後も絶えるこ
となく続いていたことが分かる。絵巻には、
周辺の各町が趣向を凝らした祭礼屋台や祇園

山車を曳き出す様子が描かれており、この日に限っては町人たちが城中に入れる特別な日であった
という。また、天保12年(1841)の「赤城詣」によれば、祇園祭礼は各町にとって年に1回の楽
しい行事で、競って踊り屋台や山車を出して練り歩いたとあり、宝暦(1751~1764)の頃がもっと
も盛んで、寛政2年(1790)には本町で歌舞伎芝居が行われた様子も書かれている。

その後の推移は定かではないが、明治31年(1898)の「前橋案内」では、遊勝案内⁴の6月の項
目に以下のような記述がみられ、その他の文献にも「連雀町の天王祭り」や「祇園会」などが頻繁
に登場することから、祇園祭礼は明治時代も続いていたと推察される。

「(前略) 氏子の町々より花山車を挽き出し盛に祭礼を行ふ。現在は、流行病などの関係より九月の秋冷の季に
延期することとなりぬ。(句読点追加、漢字は常用に変換)」

明治末期に入ると政府による神社合祀政策が始まり、連雀町八坂神社は約100m東に位置する八
幡宮に合祀されたため、連雀町八坂神社としての祭礼はここで途絶えたと推察される。しかし、大
正2年(1913)9月16日の上毛新聞には、「前橋大祭の三日」の見出しで以下の記事が掲載され
た。

「(前略) 十四日、北曲輪町より神明町を出て白傳横丁より新竪町通りへ
かけて全町を花車にて埋め、(中略) 厩橋を渡り、向町通りを大渡河原町ま
で繰込み、逆に引返して細ヶ澤新道を岩神、国領町へ詰め、(中略) 小柳町を
通り比利根橋際にて集合し、弁天通りにて解散したるは午前三時の深更な
り。十五日は、立川町に揃へ尻より諏訪町へ突込みて後向となり、一番より
順次、萱町を通り榎町へ抜け、横山町通りより桑町、連雀町、(中略) 芳
町より榎町、紺屋町へ出て目出度解散。市中の賑はひは云わずもがな、前橋
に三十余本の花車が練る大祭りがあると聞き、上野線に両毛線に見物の客は
充滿して、(中略) 着毎に吐き出さるゝ人員は数万人に及びたるべし。」



前橋大祭の様子
提供：上毛新聞社

⁴ 年中行事や名所について紹介するもの。現在で言うレジャー案内。

この記事から分かるのは、連雀町八坂神社が合祀されたわずか数年後には、中心商店街全域を巡行する山車の祭典が数万人もの見物客を集めて行われていたという事実であり、「連雀町八坂神社の祇園祭礼」が「八幡宮の前橋大祭」として継承されたことを示している。その後も大正5年（1916）には、八幡宮の県社昇格に伴い市内42か町に及ぶ山車巡行の大祭典が計画されるも、伝染病の蔓延で中止を余儀なくされたことが新聞記事になり、そこからほぼ毎年、9月中旬には前橋大祭の記事が登場する。その間、祭典の規模は年次によって異なっていたようであるが、昭和に入ってから記事の掲載は続き、戦前まで山車の祭典が続いていたことが分かる。



前橋大祭で使用された山車で唯一現存する「向町の山車」

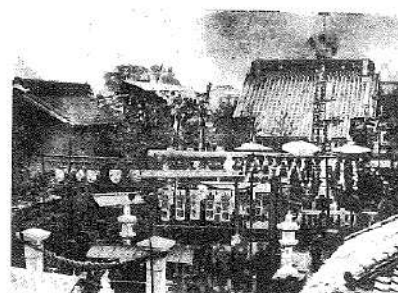
しかし、昭和20年（1945）の前橋空襲によって、祭典を司る八幡宮の社殿が全焼、各町の山車もほとんど焼失し、前橋大祭はここで途絶えた。なお、雷電神社（平和町一丁目）に残る「向町（現在の平和町）の山車」（市指定の重要有形民俗文化財・平成25年（2013））だけが、唯一空襲を免れ、現在も保管されている。

【横山町八坂神社の神輿渡御】

神社の秋の祭礼では、神輿を奉じて町を練り歩くケースが多く見受けられるが、明治時代の八幡宮や神明社、熊野神社、横山町八坂神社などでも神輿の渡御が行われており、中でもにぎやかで有名であったのが横山町八坂神社の「天王神輿」であった。

横山町八坂神社の神輿は、幕末の前橋城再築に際し、築城に協力した神社への礼として藩主松平氏から神輿の要材が寄進されて造成されたものである。当時、横山町八坂神社の秋の祭礼では、本宮である天川村（現在の文京町四丁目）の八坂神社まで神輿渡御を行っており、これを天王神輿と呼んだ。渡御の途中、広瀬川に乗り入れて川中で神輿を採み揺らす勇ましが評判を呼び、見物人が山をなしたと伝わる。結局、あまりの暴れぶりに本宮までの渡御は明治23年（1890）頃には打ち切れ、渡御の範囲は中心商店街一円に留まることとなった。なお、神輿渡御そのものは、少なくとも昭和17年（1942）までは続けられていたことが分かっている。

その後、明治31年（1898）に境内地を拡大すると、その記念として、花柳界では縁起をかつぐまつりとされる「お酉さまを」との声が起こり、当時、酉の市で有名であった佐野鷲宮神社（栃木県佐野市）から勧請を行い、花まちにふさわしいまつりとして、横山町八坂神社でも毎年12月に「酉の市」を行うようになった。以降、秋の神輿渡御と年の瀬の酉の市は、新年の初市をしのぐ盛況ぶりであったことが伝えられている。（出典：昭和56年（1981）「我がふるさと」）



上：境内地拡張後の横山町八坂神社
下：天王神輿の様子（昭和17年頃）
出展「我がふるさと 小石神社と横山町」
町田修一郎（昭和56年（1981））



小石神社の分社

明治末期には、横山町八坂神社も政府の神社合祀政策によって複数の神社と合併し、明治 40 年（1907）に「小石神社」に名称変更となるが、「生糸のまち」の旦那衆を支える「花まち三ヶ町」の鎮守として繁栄は続いた。しかし、昭和 20 年（1945）の前橋空襲によって社殿も神輿も焼失し、小石神社の神輿渡御はここでいったん途絶えた。その後、社殿は昭和 30 年（1955）に再建されたが、社会情勢の変化に伴って昭和 46 年（1971）に郊外（敷島町）への移転が決定、跡地には大型百貨店が建設され、その屋上には小石神社の分社が建立（昭和 48 年（1973））されている。また、神輿も戦後再建されており、現在では前橋まつり当日に、神輿愛好家らによって現在地から担ぎ出され、まつり会場を巡行している。

なお、小石神社の移転に際して、地元商店街から酉の市の継続が強く望まれたため、立川町通りに面した熊野神社が引き継ぐこととなり、地元商店街・熊野神社・小石神社の共催で「大酉祭」として現在も続けられている。

【前橋まつりの歴史】

昭和 20 年（1945）8 月 5 日、本市は大規模な空襲を受け、市街地の 8 割が焦土と化した。しかし、かつて都市消滅の危機を 2 度克服してきた本市では、ここでも復興への強い心意気がみられ、市民が総力を挙げて尽力し、全国で最も早いとされる昭和 28 年（1953）には復興に目途をつけている。

戦後復興は区画整理や街路事業などの都市整備が中心であったが、中でも「けやき並木通り」と呼ばれる幹線道路は、後年、本市の代表的なシンボルロードとなり、戦後復興を象徴する整備事業となった。このほか、戦後復興の取り組みには、戦没者・被災者の慰霊や市民の活力高揚を意図する催しも含まれていた。本市が発行していた「前橋市事務報告書」によれば、昭和 23 年（1948）に開催された「復興祭」はそうした催しの一つで、戦後復興に際して市民の総力を結集するムードを醸成することが目的であった。翌年には名称を「商工祭」に変え、しばらくの間は物産の展示即売会や花火大会、芸能大会などが行われていたが、多くの市民から「前橋ならでは」を感じさせる行事の開催や、観るだけではなく参加できるイベントを求める声が寄せられていた。

そこで、昭和 34 年（1959）に商工祭から「前橋まつり」に名称を変更し、かつて前橋を代表する夏秋の風物詩で、空襲によって途絶えてしまった「祇園祭礼（前橋大祭）」と「神輿渡御」を再現する意味を込めて、会場範囲を中心商店街全体に広げ、山車と神輿の巡行を中心とする行事に再編し、市民参加型の新たな伝統行事としての定着を目指すこととなった。

前橋まつりの名称になって間もなく、古くからりょうもつ尚毛地域（群馬～栃木）の俗謡として知られるやまぶし八木節音頭が行事の一つに加わり、



けやき並木通り



八木節



鼓笛パレード（昭和 42 年）

昭和 40 年（1965）からは、市内の小学生によるマーチングバンドが本町通りを行進する「鼓笛パレード」が追加され（当時の新聞記事より）、平成 7 年（1995）には、北海道の「ソーラン節」をヒントに、歌手・三橋美智也が歌った「前橋音頭」（昭和 31 年（1956））をアレンジした「だんべえ踊り」が行われるようになった。



だんべえ踊り

現在では、「生糸のまち」の時代に繭市場通りと称された立川町通りを主会場に、桑町通り・本町通り・横山町通り・千代田通りを範囲として二日間にわたって開催される。まつり本部は、勇壮な天王神輿で名を馳せた小石神社から西の市を引き継いだ熊野神社の参道敷に設置される。主要な通りには露天商が所狭しと軒を連ね、各行事の参加者と見物客でごった返す。行事の中には子供が主役のものもあるため、わが子・わが孫の雄姿を見ようと両親や祖父母が沿道にかけつけ、まさに市民総参加の催しとなっている。

なお、本市では、江戸時代に現在の市域内で藩主を務めた酒井氏、松平氏、秋元氏、牧野氏の四大名家を「前橋四公」と称し、平成 28 年（2016）から「前橋四公祭」を開催しているが、平成 30 年（2018）の第 3 回では、70 回目を迎えた前橋まつりと同日開催とし、前橋まつり二日目に各家ゆかりの人物に扮した行列が会場を練り歩く「四公武者行列」を行った。



写真は松平家の武者行列

【山車の祭典の推移と前橋まつりの関係】

行事名	祇園祭礼	前橋大祭	前橋まつり
拠点神社	連雀町八坂神社 ※明治末期に八幡宮に合祀	八幡宮	八幡宮 ※神社の祭礼ではなくなったが、ルーツである八幡宮自体は現存
時代	江戸中期～明治	大正～戦前	戦後～
実施場所 内容	各町が曳き出す祭礼屋台や祇園山車が、連雀町通りや本町通りに集結	各町が曳き出す花車（山車）が中心商店街一円を巡る	各町の山車が各町内を巡行 & 中心商店街を巡行後、立川町通りで山車行列

【神輿渡御の推移と前橋まつりの関係】

行事名	天王神輿	各社の神輿	前橋まつり
拠点神社	横山町八坂神社 ※明治末期に小石神社に改称、戦後、郊外に移転し、一部の祭礼を熊野神社に継承	八幡宮、神明宮、熊野神社	八幡宮、神明宮、熊野神社 ※担ぎ手は自治会や愛好会に変化した。横山町八坂神社以外はルーツである各社が現存
時代	江戸末期～戦前	不明～戦前	戦後～
実施場所 内容	当初は天王神輿が本宮まで巡行、明治中期から中心商店街一円の巡行に変化	各社の神輿が、鎮守する各町内を巡行	自治会や事業所、愛好会が担ぐ神輿が中心商店街を巡行後、立川町通りで連合渡御

イ 山車行列と神輿連合渡御

【山車の巡行】

各町の山車は、町内を巡行する日とまつり会場を巡行する日の二日間にわたって曳き出される。初日の町内巡行では、老若男女が山車につながれた綱を引き、各町のランドマークを経由しながら路地を練り歩く。以下では、各町の巡行ルートのうち、ルート上に歴史的建造物が位置しているものについて一部紹介する。

〔各町の巡行ルート〕

作成中

〔ルートの一例〕

○紅雲町一丁目・二丁目

紅雲町は、かつて前橋藩領の「紅雲分」であった地域で、当時の地名が現在の町名に継承されている。一丁目・二丁目ともに町内巡行は JR 両毛線までを範囲とし、ルート上には滝川一益ゆかりの長昌寺や、酒井氏の菩提寺である龍海院、水の神である市杵島姫命を祀る巖島神社などがある。

作成中



紅雲町一丁目の山車



紅雲町二丁目の山車



龍海院



長昌寺



厳島神社

○表町二丁目

表町二丁目は、明治時代には士族屋敷が建ち並んだ場所で、現在は戦後復興で整備された前橋駅前通りを中心に東西に住宅街が広がる。山車は整然とした街区の中を巡行し、ルート上にはJR前橋駅前に佇む「建設と平和」像、生糸のまちを象徴するレンガ倉庫である上毛倉庫、松平家家臣の禄配給所であった永寿寺が見られる。

作成中



表町二丁目の山車



JR 前橋駅



上毛倉庫



永寿寺

○大手町二丁目

大手町二丁目はかつての城内にあたり、巡行ルートには車橋門跡や大手門跡、風呂川などの城の遺構が見られる。山車の上には酒井氏4代ただきよ忠清扮する甲冑武者が構え立つため、県庁を背景に巡行する様はあたかも城内からの出陣を想起させる。このほか、ルート上には群馬県庁昭和庁舎や群馬会館、空襲を免れたカトリック教会の聖堂（国の登録有形文化財・平成13年（2001））など、昭和初期の歴史的資源も数多くみられる。

作成中



大手町二丁目の山車



車橋門跡



大手門跡



昭和庁舎



群馬会館



カトリック教会

○大手町三丁目

大手町三丁目は城内と城下町をまたぐ範囲にあり、巡行ルートには、本市を代表する建造物である臨江閣や前橋城跡（前橋城の土塁）のほか、城の鬼門除けである神明宮、酒井氏が開基した源英寺、松平氏の移封とともに本市に移転した東照宮がある。また、巡行ルート東端の縦の道路は「教会通り」と呼ばれ、沿線には「生糸のまち」の歴史や本市の社会福祉の成り立ちと関係の深い前橋教会、聖マッテア教会、ハリストス正教会が建ち並び、キリスト教会群の中を山車が巡行する独特の風景を見ることができる。

作成中

なお、教会通りから南西に下った長昌寺には、仏寺であるにもかかわらず、前橋教会の会員で本市の社会福祉の基礎を築いたとされる宮内文作らのクリスチャンが眠る墓が多数見られる。こうした宗教の近接・混在は他都市にはない本市独特の現象で、歴史研究者らによれば、義理人情に厚く、あまり理屈を言わないとされる上州人（群馬県民）気質と、何事にも寛大・寛容な市民性によるものであると分析されている。



大手町三丁目の山車



臨江閣（別館）



前橋城跡



神明宮



源英寺



東照宮



日本基督教団前橋教会



聖マッテア教会



ハリストス正教会

○本町一丁目

江戸時代に連雀町と呼ばれたエリアを含む本町一丁目は、かつては八幡宮の門前町としてにぎわい、現在はオフィスや住宅が多く建ち並ぶ。巡行ルート上では、ランドマークのいくつかが大手町二丁目と共通しているが、焼き過ぎ煉瓦が使用された旧勝山社煉瓦蔵が際立つ存在となっている。

作成中



本町一丁目の祇園山車



旧勝山社煉瓦蔵

○住吉町一丁目・住吉町二丁目

住吉町一丁目・住吉町二丁目周辺は、かつての「細ヶ沢町」や「小柳町」にまたがる位置にあたり、双方ともに玉繭や屑繭を中心とする繭市場が開かれるにぎやかな場所であった。両町ともに、山車は「生糸のまち」を象徴するレンガ倉庫の一つである旧安田銀行担保倉庫の脇を通り、一丁目は厩橋城主・長尾氏の時代に由来する橋林寺の脇を巡行し、二丁目は夏越のお祓いである「茅の輪くぐり」が行われる愛宕神社の脇を巡行する。

作成中



住吉町一丁目・二丁目の山車



橋林寺



旧安田銀行担保倉庫



愛宕神社

○城東町五か町

かつて城下町であったエリアを含む城東町は、一丁目から五丁目までの五か町が合同で山車の運行を行う。山車は諏訪若御子神社から出発し、上毛電気鉄道中央前橋駅の横を通過しながら各町内を巡回する。

作成中



城東町五か町合同の山車



諏訪若御子神社



上毛電気鉄道中央前橋駅

○国領町一丁目

国領町は江戸時代からの地名が残る町で、明治22年(1889)に現在の国道17号である渋川への新道が開通してから大きく発展し、製糸業最盛期の頃には、前橋を代表する大型製糸工場が建ち並んだ。山車は、かつて旅人から崇敬を集めた琴平宮の脇を通過する。

作成中



国領町一丁目の山車



琴平宮

二日目は、各町の山車が各々のルートでまつり会場の中心部にある集合場所に参集する。主会場の北側にある町は、大蓮寺の門前である弁天通りアーケードを南進し、南側の町は中央通りアーケード(桑町通り)を北上して集合場所へ向かう。その後、列をなして横山町通り～千代田通り～立川町通りへと巡行し、立川町通りに全ての山車が揃うと、各山車の奏者が一斉に和楽器を打ち鳴らす「山車行列」へと移行して終了となる。なお、この行事には、かつての祇園祭礼の様子を再現する意味が込められている。



各町の山車が勢揃いする山車行列



昭和43年(1968)の山車の巡行

【神輿の巡行】

神輿の巡行は、かつては各神社の氏子や関係者が担ぎ手となるのが一般的であったが、前橋まつりでは事業所や自治会、神輿愛好会などのさまざまな団体が担ぎ手となる。その中でも、戦前に盛んに行われた神輿渡御の流れを汲む八幡宮の神輿は本町二丁目自治会、神明宮の神輿は豎町（千代田町三丁目）自治会が担ぎ手となり、出発前はそれぞれの社で安全祈願祭が執り行われる。また、熊野神社の神輿は神輿愛好者で構成する千熊翔鳳会が担ぎ手であるが、まつり当日は、熊野神社の参道敷にまつり本部が設置されるため、神社の裏通りを経由して弁天通りに設置された仮宮から出発し、地元の名刹である妙安寺前で神輿を高々と指し上げてから集合場所へ向かうのが通例となっている。

初日・二日目ともに、各団体がまつり会場を巡行し、立川町通りに全ての神輿が出揃うと、前橋^{とび}鳥伝統文化保存会による木遣唄に続いて、各団体が神輿を一斉に担ぎ上げる勇壮な「^{せんごうとま}連合渡御」が行われて終了となる。戦前の様子を知る中心商店街の古老によると、連合渡御で荒々しく神輿が揺さぶられる様子は、かつて「^{あはれ}暴れ神輿」で名を馳せた横山町八坂神社の天王神輿の揉みっぷりを彷彿とさせるという。



本町二丁目の神輿
(前橋八幡宮 HP より)



豎町の神輿



千熊翔鳳会の神輿

作成中



まつりのクライマックスを飾る
神輿連合渡御

(4) まとめ

本市の都市部において、市挙げての伝統行事として江戸時代に由来するものは初市まつりが唯一である。また、前橋まつりは戦後復興の一環ではあるが、街なかの伝統祭礼であった祇園祭礼と神輿渡御を組み込んだ市民参加型のイベントとして、いまや本市を代表する伝統行事となっている。

これらに共通するのは、行事そのものに本市を象徴する歴史観が組み込まれ、歴史的経緯のある場所が舞台となっている点にある。

例えば初市まつりは、城下町の時代（関東の華）を起源としながら製糸業最盛期（生糸のまち）に「だるま市」へと変化した経緯があり、主会場は城下町の時代から続き、戦後復興を象徴するげやき並木（復興の心意気）である「本町通り」が舞台となっている。前橋まつりでは、城下町時代（関東の華）からの伝統祭礼を「山車・神輿の巡行」の形で再現し、戦後復興の機運醸成（復興の心意気）を意図した市民総参加の理念は、「鼓笛パレード」や「だんべえ踊り」などの現代的な催しに継承され、それらは製糸業最盛期（生糸のまち）に繭市場通りと称された「立川町通り」で展開されている。



市民総参加が体现される「だんべえ踊り」

このように、初市まつりと前橋まつりは始まった経緯こそ異なるが、それぞれ「関東の華」から「生糸のまち」への変遷を背景とし、「復興の心意気」に支えられた行事であることが分かる。

前橋市民の目線では、毎年、何の気なく見かける光景であるが、新年の風物詩であるダルマにも、地域の路地を練り歩く山車にも、威勢よく揉まれる神輿にも、本市の歴史的な歩みが刻まれている。これらは、将来に渡って維持向上するべき本市固有の歴史的風致であるといえる。

	初市まつり	前橋まつり
時期	1月9日の単日	10月第2土日の2日間
起源	江戸時代（酒井重忠の時代）	戦後（昭和23年（1948））
範囲	中心商店街一円	中心商店街及び近隣自治会一円
主会場	江戸時代から続き戦災復興でげやき並木となった本町通り（国道50号）	製糸業最盛期の時代に繭市場通りと称された立川町通り
特徴	江戸時代からの伝統行事が製糸業最盛期に「だるま市」へと変化	伝統祭礼であった「祇園祭礼」と「神輿渡御」の要素を取り込んだ市民参加型の行事
風情	<ul style="list-style-type: none"> ・寒空に映えるダルマや縁起物 ・街なかを練り歩く市神の行列 ・値切りを巡る掛け声の応酬 	<ul style="list-style-type: none"> ・響き渡る鼓笛パレードの音色 ・連合渡御や山車行列の熱気 ・路地を練り歩く各町の山車

I - 1 街なかの伝統祭礼にみる歴史的風致の広がり

作成中

2 前橋公園の花見にみる歴史的風致

関東
の華

生糸
のまち

食文化

(1) 古くからの行楽地=前橋公園

前橋公園は明治時代にできた市内初の公園で、眼下に利根川が流れ、遠景に榛名・妙義の山並みを望む絶景から、萩原朔太郎や室生犀星などの多くの文化人に愛されてきた。また、古くから市内有数の行楽地として多くの人々に利用される一方、園の一部はかつての城内であったため、土塁や堀などの遺構が散見され、歴史情緒が色濃く感じられる場所でもある。

平成20年(2008)に開催された「全国都市緑化ぐんまフェア」は、前橋公園がメイン会場の一つであった。それまで、園内には臨江閣やるなばあく(中央児童遊園)のほか、旧前橋競輪場(バンク)や旧県立武道館が近い場所にひしめき合っていたが、緑化フェアの開催を契機に大規模な再整備が行われ、広大な広場や日本庭園を備える現在の姿となった。

平成27年(2015)にNHK大河ドラマ「花燃ゆ」が放映され、群馬県庁昭和庁舎に大河ドラマ館が設置されると、ドラマの主要人物で初代群馬県令を務めた榎取素彦ゆかりの地を巡る、昭和庁舎から臨江閣までのガイドツアーが人気を博し、来館者の多くがこれに参加した。ツアー参加者からは、前橋公園の景色や臨江閣の風格を評価する声が多く寄せられ、本市屈指の都市観光資源であることが改めて明らかとなった。



花見の名所として知られる前橋公園

作成中

(2) 関連する建造物

【前橋公園の花見を構成する建造物】

①前橋公園(楽歩堂前橋公園)

前橋公園は、明治38年(1905)の日露戦争の記念で建設された近代都市公園である。もともとは師範学校の運動場として利用され、東照宮祠畔公園としても親しまれていた場所であるが、臨江閣の本市への移管に際し公園として組み入れられ、明治43年(1910)には、「一府十四県連合共進会」⁵の祝宴場としても利用された。園の一部は、前橋城内の柳原口内や空堀にあたり、かつての土塁や堀が園内の散策路や園周水路として利用されている。

⁵ 共進会は現在で言う国内博覧会のこと。明治43年(1910)の共進会は群馬県主催で、東京・神奈川・埼玉・千葉・茨城・栃木・群馬・新潟・長野・山梨・福島・宮城・山形・岩手・青森が参加したことから、「一府十四県連合共進会」と呼ばれた。

また、園の西側は利根川に面しており、治水工事で整備された土木工作物が今も残る。中でも、明治30年代に整備された「岩神の石堤」は、^{かすみてい}霞堤（開口部を設けた不連続な堤防）の機能を有しており、都市部で大規模に残っている点が評価され、土木学会関東支部から「選奨土木遺産」に認定されている。



昭和9年（1934）（推定）の前橋公園
出展：前橋市鳥瞰図（国際日本文化研究センター）

古くから桜の名所として知られるが、明治25年（1892）に初代市長に就任した下村善太郎が、「市民の憩いの地になるように」と桜を植樹し、戦後の昭和26年（1951）には公園を含む周辺一帯にも桜が植樹されたため、現在では市内有数の花見スポットとなっている。

園内には、明治を象徴する臨江閣、昭和レトロを感じさせるるなばあく（中央児童遊園）、平成前橋を象徴する屋内型競輪場（グリーンドーム前橋）が建ち並び、前橋近代化の歩みを一望することができる。なお、園の南にある「さちの池」は、昭和34年（1959）に上皇陛下（当時は皇太子殿下）の成婚を記念して造成されたもので、池の外周が群馬県の県域を表わす「鶴舞う形」になっている。また、池の中央には、在日朝鮮人の母国帰還に尽力した当時の市長への感謝として、昭和34年（1959）に帰還者から寄贈された「親子三羽鶴」と呼ばれる噴水がある。ブロンズ製の親子鶴は、朝鮮出身の父、日本人の母とその子供が祖国へ帰る姿を表している。



さちの池の親子三羽鶴

②原嶋屋総本家の蒸籠塚

原嶋屋は、群馬県民の郷土食として知られる「焼きまんじゅう」の老舗で、原嶋屋の伝承によれば、^{あんせい}安政4年（1857）に初代・^{はらしまるいざう}原嶋類蔵が創業したとされる。創業当初は店頭売りせず、荷車に商品を積んで売り歩く曳き売りであったが、後に現在の立川町通りに店を構え、明治15年（1882）に現在地に移った。店舗は、現在地では3代目となる建物で、昭和48年（1973）に建築され、内装・外観ともに初代の生家を模した造りとなっている。



蒸籠塚



原嶋屋総本家の店舗

店舗南側にある^{まいいそ}蒸籠塚は、製造過程で使用する蒸籠の供養塚で、昭和46年（1971）に建立されたものである。

③臨江閣

建物概要はI-1-(2)-⑥を参照

臨江閣は本館・茶室・別館の3棟から構成されるが、性格と規模が異なる3種の建築が並び立つことで、皇族・貴顕紳士から一般市民まで、また文人墨客といった風流人も幅広く受け入れ、それぞれに興を尽くし楽しませてきた。元々は迎賓館として建てられた施設であるが、初代群馬県令である榎取素彦が示した「市街共有」の理念により、早くから市民に開かれた施設でもあったのである。

例えば、完成直後の明治18年（1885）に市民有志によって開催された能興行の記録が残っているように、能や歌舞伎の舞台芸能が行われていた。明治30年（1897）にはホトトギス系俳風の「いなめ

会」が発足し、大正時代に入ると臨江閣での句会や庭園を散策しながら句を詠みあう「合評会」が盛んに行われていたとされる。この時代は萩原朔太郎を中心に前橋の詩壇が絶頂期を迎えていたこともあり、文芸誌「キツネノス」の同人たちや結社「幻想詩社」のメンバーらによる歌会なども開かれていた。このため当時は、前橋公園を訪れたついでに臨江閣に立ち寄るのではなく、逆に臨江閣を訪れるために前橋公園に向かうのが主流だったようである。



臨江閣の前で婚礼写真を撮影する夫婦

なお、萩原朔太郎は大正8年（1919）に臨江閣で結婚式を挙げているが、その当時のみならず、現在も結婚式場としての利用が散見され、近年では臨江閣を背景に日本庭園で婚礼や成人式の前撮りを行う若者が多くみられる。

戦後、臨江閣は一時的に市役所の仮庁舎となり、昭和30年（1955）から26年間は公民館（中央公民館）として様々な団体に利用された。中でも印象的なのが、「上毛かるた大会」の決勝戦で、毎年、正月明けの日曜日には、大会に出場する子供とその家族が臨江閣へ向かって行列をなすのが恒例の風景であった。現在は市の貸館として運営されており、別館2階の大広間は柱のない広い和室空間であるため、映画やドラマなどのロケで頻繁に利用されるほか、平成29年（2017）には日本将棋連盟のタイトル戦である「第30期竜王戦七番勝負」の第3局が開催された。



第30期竜王戦（広報まえばし
平成29年10月1日号より）

【花見の舞台となる街並みを構成する建造物】

④前橋城跡

I-1-(2)-⑦を参照

⑤前橋東照宮の鳥居

前橋東照宮は、後に前橋藩主となる松平大和守家の初代・直基が、最初の領地である越前勝山にて寛永元年（1624）に創建した神社である。その後松平氏は、北は山形から南は大分まで13回もの移封を繰り返すことになり、東照宮もその都度移転した。幕末に前橋城が再建され松平氏が川越から帰城すると、明治4年（1871）に川越で造営した社殿が本市に移築された。

前橋公園に隣接する好立地にあり、藩主ゆかりの社として長らく親しまれてきたが、建物の老朽化に伴い、令和3年（2021）に本殿を残して建替えが行われた。境内入口にある鳥居は、明治44年（1911）に建立されたものである。



東照宮の鳥居

⑥旧石川橋の欄干

石川橋は広瀬川に架かる橋で、大正4年（1915）に建造された市内初の鉄筋コンクリート橋である。市道00-018号線（（都）県庁群大線）の拡幅に伴い、令和2年（2020）に新橋に架け替えられた。架け替えに際して、意匠は旧橋を踏襲した天然石を採用し、大正4年の刻銘が残る旧橋の親柱と欄干は原型のまま市道沿いに移設された。



旧石川橋の欄干と臨江閣

⑦るなばあく（中央児童遊園）

昭和29年（1954）に周辺町村との合併を記念して開催された「前橋グランドフェア」を契機に、旧前橋城の空堀に開設した中央児童遊園を前身とする遊園地である。（出典：大前橋建設記念事業誌・同年）

1ヘクタールほどの面積の中に8種の大型遊具が設置されており、入園料が無料なうえ、各遊具の利用料金も安価であることから、「日本一安い遊園地」とされる。開設時に設置された「もくば館」と5台の「電動木馬」は、平成19年（2007）に国の登録有形文化財に登録された。これらは、全国の遊園地で現役稼働する遊具の中で、登録有形文化財となっている唯一のものである。



登録有形文化財の木馬

「るなばあく」の愛称は、平成16年（2004）に市民公募によって付けられたものであるが、これは郷土の詩人・萩原朔太郎の詩集「遊園地にて」において、「遊園地」という言葉に「ルナパーク」とルビがふられていることに由来している。

なお、るなばあくの敷地内には、明治から大正にかけて「波宜亭（坡宜亭）」という茶店が存在していた。店舗建物は当時県内の温泉旅館や料亭によく見られた木造3階建ての構造であった。学生や文化人のサロンの場として利用され、萩原朔太郎がここを舞台にした詩を書いたことでも知られるが、大正10年（1921）、前橋市の公園計画に伴い閉店した。

⑧縣治記念碑

大正6年（1917）、本市の人口は6万人に達し、明治元年（1868）当時の4倍となった。このような飛躍的な発展は、「県庁が置かれたからである」という歴史認識が広く共有されていたこともあり、市制施行25年であった同年、県庁移転に尽力した人々を称える「縣治記念碑」を前橋公園に建立した。石碑には、下村善太郎ら25人の名前が刻まれていることから、これを「前橋二十五人衆」と称している。



縣治記念碑

(3) 歴史と伝統を反映した人々の活動と周辺の市街地環境

○前橋公園の花見～花見と焼きまんじゅう～

ア 前橋公園が名所となった背景と愛される理由

明治17年(1884)、群馬県令・楢取素彦^{かとりもとひこ}は下村善太郎^{しもむらぜんたろう}らの有力者を招き、次のように迎賓館の建設を提言した。

「(前略)前橋も大分発達して来た。いろいろの設備も出来ては居るが、而して将来高位の方が前橋に来られた場合に、その方々を待遇する家がまだ前橋にはない。是は前橋に取って甚だ残念に耐へられないから、それを建築したいと思っている。場所は旧お虎が淵の北方の堤上、大利根川の流に面して遠く妙義の奇峰や、浅間の雲を眺めて風光絶佳であるから、最もよい場所だと考へる。」



群馬県令 楢取素彦



下村善太郎
(後の初代市長)

前年に、迎賓館を兼ねて建設した生糸改^{きいとあらなめじょう}所を前橋大火で焼失していた経緯もあり、一同は即座に賛成し、敷地は下村が自己所有地を提供することとした。建設資金は、下村を含めて各界各層から続々と寄せられ、同年9月には本館、11月には茶室が完成し、翌18年3月に落成式が行われた。楢取は、建物を「臨江閣」と命名し、建設に際して多額の醸^{もろみ}金を受けた経緯を重んじ、それぞれの棟札に「市街共有」の文字を記した。

臨江閣が建設された場所は、幕末に再築された前橋城内の北端に当たり、酒井氏が藩主の時代には利根川が流れ込む入江の「虎が淵」と呼ばれ、利根川の流路が変わってからは「空堀^{からぼり}」として使用されていた低地帯の北側の小高い土手の上であった。明治に入り、この辺り一帯は下村が所有していたが、「県都前橋の飛躍のためならば」と敷地の活用に賛同したのだという。

こうして臨江閣は、近代前橋発展の立役者であった楢取と下村の連携によって誕生した。その威風堂々とした佇まいは、虎が淵北方の「風光絶佳」な眺めや、県都前橋誕生の足掛かりとなった再築前橋城の遺構と調和して見事な景観を形成し、臨江閣の誕生秘話も相まって辺り一帯は市民にとって特別な場所・憧れの地となった。

後年、臨江閣や前橋公園が持つ求心力は、萩原朔太郎をはじめとする多くの文化人を引き寄せ、この地で親交を深めたことがさまざまな文献に残されている。例えば、草野心平^{くさのしんぺい}は、「わが青春の記」(昭和40年(1965))で、臨江閣からの眺めや前橋公園について次のように言及している。

「上州という言葉のもつ音感がまず私をひきつけた。(中略)赤城、榛名、荒船、そして浅間、初めて見る上州の風景は見事だった。旅ではなく、私は前橋に住もうと吐嗟に決めた。(中略)前橋公園には歩いて二分位のところだった。しばらくの間は、毎日一回、公園の鉄棒にぶらさがるのが私の日課になった。」

また、前橋城址や臨江閣を含む一帯は、明治38年(1905)に前橋公園となる以前から「地域の趣を代表する景勝」として選出されており、古くから前橋一の名所であったことを示すとともに、「臨江閣」・「桜」・「城址」などが組み合わせで紹介されていることが多く、これらをまとめて巡るのが、現代にも続く前橋公園の楽しみ方であることが分かる。

- ・明治 20 年（1887）前橋市街十景
神明社夜雨・**敷島碩帰雁**・岩神之飛巖・双子山秋月・八幡社雪景・**臨江閣夕涼**・楽水園聴蟲・是字寺晩鐘・**公園堤櫻花**・利根川双橋
 - ・明治 24 年（1891）前橋十景
岩神奇岩・楽水園聴蟲・二子山秋月・神明社夜雨・是字寺晩鐘・**公園櫻花**・**臨江閣晚涼**・**敷島帰雁**・八幡社雪・刀根双橋
 - ・大正 10 年（1921）前橋二十名勝
前橋公園・**前橋城址**・縣社八幡宮・龍海院・利刈牧・一里の渡・比刀根川・天野藤園・二子山古墳・富士山古墳・小出川原公園・岩神飛石・風呂川・梅の井・妙安寺・大渡・**虎が淵**・**敷島河原**・橋林寺・文筥柳
 - ・大正 13 年（1924）前橋八景
天川堤櫻花・利根川双橋・是字寺晩鐘・**臨江閣夕涼**・岩神の飛石・双子山秋月・八幡宮暮雪・神明社夜雨
 - ・昭和 11 年（1936）前橋八景
厩橋城址・**お虎ヶ淵**・お艶が岩・岩神の飛石・龍海院・群馬会館前・一里の渡・比刀根橋・二子山の夕月
 - ・昭和 31 年（1956）前橋観光十景
敷島公園・広瀬川の遊歩道・天川大島の松並木・群馬大橋・萩原朔太郎の碑・**児童遊園**・総社の明神様・綜合グラウンド・**臨江閣**・市庁舎屋上より赤城山を見る
- ※「敷島碩」「敷島」「敷島河原」は、大正 11 年（1922）に敷島公園（敷島町）を開設するまで、前橋公園西側に広がる利根川河川敷（現在の前橋公園の親水・水上ステージゾーン）の呼称であった

さらに、前橋公園では歴史の節目でさまざまな行事や式典が行われており、市民にとっての「特別感」がますます重みを増していったと推察される。

- ・明治 43 年（1910）一府十四県連合共進会の祝宴の開催
- ・大正 6 年（1917）市制施行 25 周年記念「**縣治記念碑**」の建立
- ・昭和 14 年（1939）隣接する**厩橋招魂社**が護国神社となる
- ・昭和 29 年（1954）周辺町村との合併記念「前橋グランドフェア」の開催

昭和 11 年（1936）には、『前橋観光案内』にて前橋公園が次のように紹介されており、公園の桜や景色、銅像や石碑を巡る散策は、他都市からの誘客が期待されるレジャー（行楽）であったことを示している。

春は花、夏は涼み、秋の夕陽に、冬の雪景色総面積一万二千五百坪余あります。堤上に桜樹茂り、下は坂東太郎と云はれる利根の清流、西岸は見渡す限りの沃野の彼方に典雅の榛名、噴煙の浅間、さては奇形妙義の山々、東北には赤城の雄大に日光の連邦を望み、園内には初代市長故下村翁の銅像、西南戦役以来の本市出身戦病没勇士の英霊を祀る招魂社、釜鷄の武勲を讃へる勇士の彰忠碑あり、花壇に遊園に、水泳場の施設もあり、四季散策の人が絶えません。

(漢字は常用に変換)

このように、前橋公園は古くから前橋一の名所であったことに加え、市民にとって特別な場所でもあることから、現在も多くの市民に愛され、多くの人が出かける行楽地となっているのである。

作成中

イ 前橋公園の花見の歴史

本市では明治 25 年（1892）4 月 1 日に市制施行となり、初代市長には下村善太郎が就任した。4 月 10 日には、下村がかねてより計画していた楢取前県令の功績を称えるための「前群馬県令楢取君功德碑（以下、功德碑）」の建碑式が挙行された。碑文の書き出しはこのように記されている。

今元老院議官、楢取君之令于群馬県也、勤儉以下泣下、忠誠以奉上、休養民力、宣布徳教、風移俗易、君已去、而士民翕然、謳唸弗已、（以下略）

（今の元老院議官楢取君の群馬県に令たるや、勤儉以て下に泣き、忠誠以て上に奉じ、民力を休養し、徳教を宣布し、風移り俗易はる。君已に去るも、而るに士民翕然として謳唸すること已まず。）



前群馬県令楢取君功德碑

ここには、楢取の県令としての政治姿勢（基本方針）がうたわれており、楢取が「勤儉」や「民力休養」を重視したことが分かる。民力休養とは、一般的には国民の税負担を軽減し、生活の安定を図るべきとする主張と解される。より広い意味では、余暇の過ごし方や心のゆとりなどを含めた市民生活の豊かさを求める考え方であるともいえた。こうした背景もあり、楢取の政治姿勢を引き継いだ下村は、功德碑の周辺一帯が「憩いの地になるように」との願いを込めて、市制施行の記念に桜を植樹した。これが、近代都市装置としての前橋公園設立の第一着手であり、現在も多くの人々がにぎわう「前橋公園の花見」のルーツである。なお、明治 24 年（1891）の「前橋繁昌記」によれば、以前からこの辺り一帯は花見の名所であったとされているが、下村の植樹によって確たる名所となったようである。

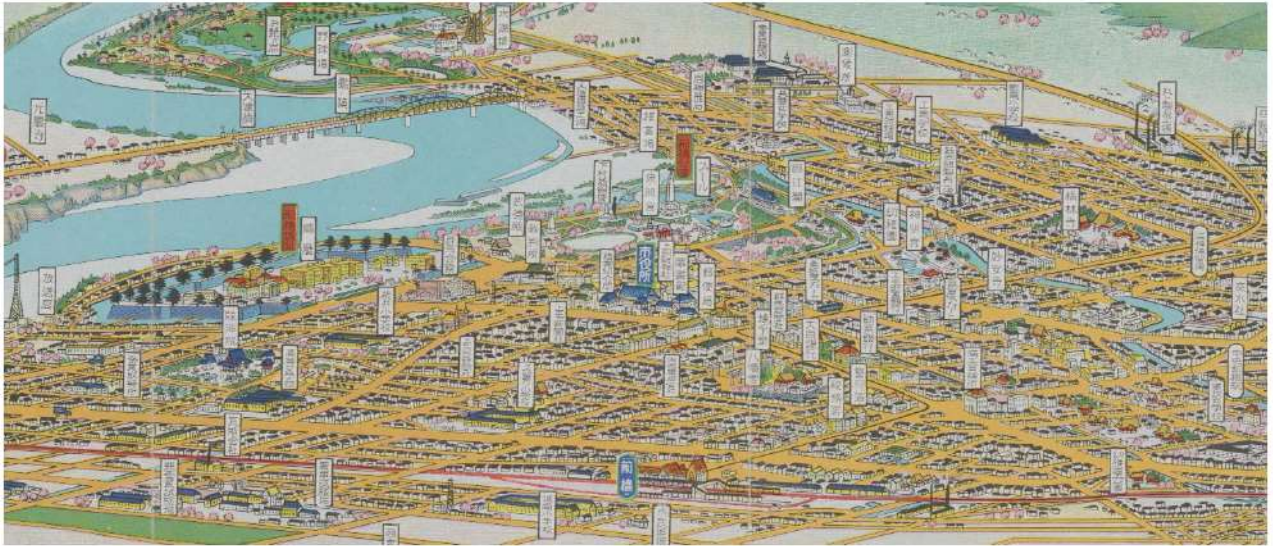


旧前橋城土塁の桜
上：朔太郎撮影「前橋公園堤の桜」
下：現在の様子

下村は植樹の翌年に他界しており、花見客でにぎわう前橋公園の姿を見ることは叶わなかったが、市民らの寄付によって「故下村翁銅像」が明治 43 年（1910）に公園を一望できる堤の上に建てられ、昭和 18 年（1943）に戦時資材として供出されるまで前橋公園を見守り続けた（現在は前橋市役所前に再建され、来庁する市民を見守る形になっている）。

下村の銅像が建立される 2 年前の明治 41 年（1908）には、県都前橋誕生の契機となった前橋城再築・前橋藩再興を果たした最後の藩主・松平直克の功績を称える「前橋城址の碑」が前橋公園から約 80m 南の本丸土塁の上に建立され、大正 6 年（1917）には県庁誘致に尽力した人々を称える「縣治記念碑」が東照宮南に設置された。

これにより、松平直克を称える前橋城址の碑、楢取素彦を称える功德碑、下村善太郎を称える銅像、前橋二十五人衆を称える縣治記念碑が前橋公園一帯に設置されたことになり、年に一度、前橋公園で花見をするということは、前橋の発展（復興）の契機となった彼らの功績を称えるとともに、後世にその気概を脈々と引き継いでいくことを意味するものとなった。



昭和9年（1934）（推定）の鳥瞰図 出典：吉田初三郎地図（国際日本文化研究センター）
中央上の東照宮の左隣に下村翁銅像が見える

このように前橋公園での花見は、市民にとっては特別な意味を含むものであったが、例えば、大正3年（1914）には、萩原朔太郎と親交の深かった室生犀星が、詩「前橋公園」で桜の様子を描写しており、前橋公園や桜の歴史的背景を知らずとも、目を引くものであったようである。

すあすあたる櫻なり 伸びて四月をゆめむ櫻なり すべては水のひびきなり 四阿屋の枯れ芝はすこし衰しかれども 花ぞのになんの種子ならしてしきりに芽吹き きそよりもなほ萌えづるげ（以下略）



土手上にある臨江閣は花見をしている場所からもよく見える

また、大正5年（1916）4月10日の上毛新聞には、「工女連の観桜」の見出し記事が掲載されており、本市が「生糸のまち」最盛期であった頃には、製糸工場で働く女性たちにとっても前橋公園での花見は大変な楽しみであり、前橋公園を訪れ、臨江閣にも立ち寄るといふ、今と変わらぬ楽しみ方をしていた様子が描かれている。

「向町共同組合にては、約九百人工場門前に集合して列を整へ、向町通りを南に折れ柳橋を渡り市公園に入り、二三分咲の桜樹の下に嬉戯して自由の身に帰り、夫より臨江閣別館に集りて午前中は義太夫、午後は芸妓連の手踊あり、一日の歓を盡して各工場に帰るは七時半頃ならん。（中略、句読点追加）」

戦後、桜はさらに植樹されて県警本部北側の土塁周辺や利根川への放水路沿いまで広がり、現在では公園を訪れた花見客はもとより、近隣を通行する者の目も楽しませしてくれる市内屈指の花見スポットとなっている。



現在は広い範囲に桜が植樹されている

ウ 焼きまんじゅうの歴史

平野部の広範囲で古くから米麦の二毛作が行われてきた群馬県では、米に代わり地粉（地元産の小麦粉）でうどん・餅・饅頭などの「粉もの」をつくり、食してきた歴史がある。群馬ではこれを「粉食文化」と呼ぶ。中でも焼きまんじゅうは、他都市ではみられない形状の粉もので、県内では広く食されてきた習慣があり、現在では群馬を代表する郷土食として知られる。

その起源には諸説あるが、市内では原嶋屋初代・類蔵が売り始めたものが創始であるとみられており、明治31年（1898）の「前橋案内」や大正3年（1914）の「郷土研究」に複数の記述があることから、少なくともこの時代には郷土食として認識されていたことが分かっている。

3代目・熊蔵が記した「焼まんじゅうあれこれ」（昭和44年（1969））によれば、初代の類蔵は、ふかした里芋を竹串に刺し味噌を塗って焼いた「芋串」にヒントを得て、これをまんじゅうに置き換えたものを開発した。当初は、芋串と同様に味噌を塗って焼くだけのものではあったが、黒砂糖を入れた甘辛味噌にしたところ大変な好評であったため、この味に定着したのだという。

【焼きまんじゅうの製造工程】

①種づくり（もち米を煮て木製容器に移し、麴をまぶしてしばらく寝かせる）



②捏ね（種・小麦粉・水を捏ね、捏ねた生地を小分けにする）



③ふかし（蒸籠に並べてしばらく寝かせからふかし、生地を取り出して別の蒸籠に移す）



④分類・串刺し（生地を切り離して形を選別、4つで一串にひとつひとつ手で竹串に刺す）



⑤焼き（焼く前に赤味噌・ザラメ・水アメの「味噌だれ」をつけ、さらにたれを塗り重ねながら7～8分焼く）



現在、県内で見られる焼きまんじゅうのほとんどは、「味噌だれを塗って焼いたもの」であることから、原嶋屋と同様の製法が時間をかけて拡散していったものと推察される。市内では、昭和後期あたりまで焼きまんじゅうを提供する店があちこちにあり、往時に比べれば少なくなったものの中心市街地近郊には現在も多くの焼きまんじゅう店が存在する。また、前橋公園や敷島公園など、市内の行楽地の近隣には、創業100年超の老舗があるのも特徴的である。

No.	店舗名／所在地	創業年	No.	店舗名／所在地	創業年
①	原嶋屋総本家 平和町 2-5-20	安政 4 年 (1857)	⑤	日赤前たなかや 朝日町 3-12-7	昭和 10 年 (1935)
②	田中屋製菓 若宮町 1-7-4	大正 13 年 (1924)	⑥	和田式焼きまんじゅう 天川大島町 1-35-9	平成 17 年 (2005)
③	田中屋本店 下小出町 3-2-1	不明 (100 年超)	⑦	細井酒店 南町 2-34-10	平成 21 年 (2009)
④	さぶちゃんの焼きまんじゅう 上細井町 1922-1	平成 22 年 (2010)			

作成中

なお、焼きまんじゅうと同様に愛されたもう一つの郷土食として「片原饅頭」があった。片原饅頭は、本市で「福祉の祖」と称される実業家・宮内文作が明治2（1869）年から売り出し始めた酒饅頭で、前橋繁昌記をはじめ様々な文献に登場する。一時は焼きまんじゅうよりも人気を博し、萩原朔太郎や幼少期を前橋で過ごした鈴木貫太郎（第42代内閣総理大臣）が、おやつとして好んで食した記録も残る。160年を超える老舗として営業を続けたが、平成8（1996）年に惜しまれながらも閉店、地元の実業家が平成22（2010）年に復元に成功し営業を再開するも、令和2年（2020）に再度閉店し、再開の目途はたっていない。



片原饅頭（復元）

エ 花見と焼きまんじゅう

前出の「焼きまんじゅうあれこれ」には、「あちらこちらで縁日の多い上州では、その出店には必ずといっていいほど、焼きまんじゅう屋が目につく」との記述がある。実際に、本市の四大大年中行事である「初市まつり」、「七夕まつり」、「花火大会」、「前橋まつり」では、焼きまんじゅうの露店が散見されることから、その傾向は現在も続いていることが分かる。とりわけ前橋一の名所にして古くから市内随一の行楽である前橋公園の花見では、開花の前後1か月程度、園内でさまざまな露店が商うが、その中には必ず「焼きまんじゅう」の暖簾やのぼり旗が見られる。また、前橋公園から程近く、市内一の老舗である原嶋屋総本家の店主によれば、花見の時期は一番の稼ぎ時で、皆こぞって焼きまんじゅうを持って前橋公園へ向かい、芝生の上で広げて食べるのだという。



焼きまんじゅうの露店

明治24年（1891）の前橋繁昌記には、「此の図は前橋の名物として人口に膾炙する味噌つけ饅頭なり（漢字は常用に変換）」とあり、当時はまだ焼きまんじゅうではなく「味噌つけ饅頭」と呼ばれていたようであるが、原嶋屋はこの時点ですでに現在地で商売をしており、翌年には下村善太郎が前橋公園一帯に桜を植樹していることから、「花見のお供に焼きまんじゅう」の風習はこの辺りから始まったものと推察される。



明治時代の様子（前橋繁昌記）
国立国会図書館 WEB サイトより



現在の店頭販売の様子

その後、明治40年（1907）の前橋繁昌記では、「往時は市内至る所に於て販ぎたる由なれども昨今にては僅かに紋目物日の露店に名物の味噌の香を止むるのみ。」とあり、名物としてはやや下火になった様子が視えるが、上毛新聞社の記者であった坂梨春水が大正3年（1914）に記した「郷土研究」には、「東照宮祠前の御蔭石の大鳥居に初春の光てりはえて、（中略）人口門の休憩茶屋ののれんを肩で切れれば、味噌饅頭焼く角火鉢の傍に座せる美人の声もあやしく『いらっしやい』赤い毛布を敷いた縁台に腰を掛けて、早速お馴染

の焼饅頭をといつける。」とあり、この頃も変わらず前橋の名物であったことと、前橋公園に隣接する東照宮境内の茶屋で焼きまんじゅうが提供されていた様子が描かれている。

さらに、昭和27年(1952)6月10日の上毛新聞の「茂木近之助記」には、「花よりだんご」と云うことわざがあるが、春の花見には必ずこの味噌付饅頭の店が幾軒も出た。(中略) 筆者の学生時代にはこの焼まんじゅうが、唯一の嗜好物であ

った。スポンジと称し、現存している前橋公園の茶店に入って『おぢさん一本焼いておくれ』友人数名と共に毎日の様に通ったものである。」との記述があり、花見の時期の前橋公園には焼きまんじゅうの露店が多数出店し、花見の時期以外にも園内の茶店で焼きまんじゅうが提供されていたことが記されている。

また、同じ茂木記の中には、「当時長い串に直径^{インチ}4位のまんじゅうが四ヶ付けてあり、それを炭火で焼いて味噌をつけ又それを焼いて食べるのだが、その焼く^{にま}香いが飽くなく食欲を^も需めて止まぬ学生時代の大きな魅力だった。この製造元とも云うべきは向町の原嶋屋(現在の原嶋屋のこと)で、ここの一串五ヶついていたので、学生は各方面からここに集って、この焼まんじゅうをほお張り文学を論じ、恋をささやきあいながら若き日の思い出を残したものだ。」とあり、前橋公園の茶店周辺に漂う味噌だれの香りが強く印象に残っていることや、原嶋屋が焼きまんじゅうの元祖であると認識されていた様子を知ることができる。

これらの手がかりから分かるのは、花見の時期の前橋公園には多数の焼きまんじゅう屋が出店していたこと、かつては園内の茶店や茶屋でも焼きまんじゅうが提供されていたこと、味噌だれの香りが焼きまんじゅうの象徴だということである。また、焼きまんじゅうは市民にとって、古くから「行楽のお供」であり、焼きまんじゅうを頬張りながら桜を楽しむのが、他都市では見られない前橋公園での「花見の流儀」であることが分かる。

現在、園内で焼きまんじゅうを常時提供している売店はなく、イベント時にキッチンカー事業者等が提供する程度であるが、原嶋屋の店主の話では、花見の時期には今でも複数の焼きまんじゅう屋が出店し、原嶋屋でもその時期が一番混雑するのだ



大河ドラマ「花燃ゆ」
放映時の園内の茶店

作成中

という。最近では花見の時期に限らず、臨江閣やるなばあくを訪れた前後に原嶋屋に立ち寄る人々も多く、群馬の郷土食として知られる存在になってからは県外からの来客も多いとのことである。

原嶋屋から前橋公園方面を見渡すと、広瀬川にかかる石川橋を手前に見て、風呂川沿いの老松樹林の向こうに臨江閣が見える。沿道には、焼きまんじゅうの袋を持って歩く人々の姿があり、風格ある店舗建物の周辺には味噌だれの甘い香りが漂っている。



原嶋屋方面から見た前橋公園方向の景色

(4) まとめ

前橋公園周辺はかつて「関東の華」と言われた前橋城があった場所に位置しており、都市化が進んだ本市の中心市街地において、未だ歴史情緒を色濃く残す空間である。

古くから景勝地として知られる前橋公園だが、初代群馬県令・楢取素彦の「民力休養」という政治姿勢を引き継ぎ、明治25年(1892)に初代市長に就任した下村善太郎が桜の植樹を行ったことをきっかけに、桜の名所として広く親しまれることとなった。

前橋公園の花見のお供としては「焼きまんじゅう」が定番となっていて、今も周辺の店舗や園内の露店で購入した焼きまんじゅうを片手に花見を楽しむ人々の姿を見ることができ、前橋らしさが感じられる。

古くには、萩原朔太郎や室生犀星をはじめとする文化人や、「生糸のまち」を支えた工女たちが好んで前橋公園を訪れ、花見を楽しんでいた記録が残っているが、こうした歴史を紐解くと、これまで何気なく行われてきた「焼きまんじゅうを食べながら前橋公園で花見を楽しむ」という情景は、明治時代から続く伝統と言っても過言ではない。

これらを歴史的風致として再認識し、国の重要文化財に指定された臨江閣を中核に、前橋公園を含む周辺エリアの歴史情緒の維持に努めるとともに、行楽地としての魅力とアクセス性の向上を図ることが重要である。

1-2 前橋公園の花見にみる歴史的風致の広がり

作成中

【歴まちコラム・敷島公園】

前橋公園開設から 17 年後の大正 11 年 (1922)、本市にもう一つの近代都市公園が開設された。それが敷島公園 (敷島町) である。

この公園は元来「小出河原」または「郊外公園」と称された場所で、官有地の払い下げにより整備された。公園名は一般市民からの懸賞募集により付けられたもので、応募者 1,167 人中 334 人の多数をもって「敷島公園」と決定した。

敷島公園は利根の清流に面し、上毛三山を一望できる好立地にあることに加え、2,600 本にも及ぶ青松林が広がっており、風光明媚な新名所として期待された。そうした折、昭和 5 年 (1930) から始まった昭和恐慌により、本市の基幹産業であった蚕糸業が壊滅的な打撃を受け、本市は製糸都市から観光都市への方向転換を図ることとなった。その方策の一つが、敷島公園の観光地化であった。

観光地化の手段は、敷島公園を「百花繚乱四季たえざる花によって誘客」というもので、市民に花木の寄付を呼びかけ、昭和 11 年 (1936) から翌年にかけて桜・菖蒲・つつじ・ぼけ・山紅葉を植樹。さらに、昭和 46 年 (1971) には 200 種類・2000 本ものバラが咲く「敷島公園ばら園」も開設されている。

園内には、昭和 7 年 (1932) の野球場建設を皮切りに次々と運動施設が建設されたこともあり、現在では四季を通じた行楽のほか、スポーツの拠点としても親しまれる。また、公園を観光地化する過程で行われた植樹によって、園内はもとより、園周の道路沿いなどの広い範囲にも桜が植樹されたため、都市部では前橋公園に並ぶ花見の名所となっている。さらに、前橋公園と同様に、園の近隣には老舗焼きまんじゅう店が数軒あり、「花見のお供に焼きまんじゅう」の光景は敷島公園でも見ることができる。

なお、公園の東には街なかへと至る広瀬川が流れており、広瀬川を介して敷島公園・前橋公園・中心商店街がつながるため、その回遊観光のあり方が模索されている。

作成中

3 シンボルとしての広瀬川河畔にみる歴史的風致

生糸のまち 復興の心意気

(1) 「水と緑と詩のまち」の原風景

市街地の中央を流れる広瀬川は、水量が豊富な農業用水として現在も利用されるが、単にその地理的な特徴だけではなく、時代に応じて様々な歴史や文化的背景に紐づけられることで、本市のシンボルとして大切にされてきた。

正保2年(1645)、当時の藩主に対する「舟運再開の申し出」の記録が残るように、江戸時代には舟運が主用途であった。現在の交水堰辺りは河岸として利用され、河岸周りは積み荷の集出荷による市場が形成され、にぎわう場所であったとされる。

「生糸のまち」であった明治から昭和初期にかけては、糸を繰る過程で大量の水を消費することから、川沿いには多くの製糸工場や撚糸工場、レンガ倉庫が立ち並んだ。特に、厩橋から久留方橋までの区域は中心商店街と接しているため、工場で働く人々や買い物客が行き交い、大いににぎわう場所となった。近隣には、柳座や敷島座など前橋の大衆文化を牽引した芝居小屋や、料亭がいくつも建てられ、広瀬川の川面には「かき船」と呼ばれる割烹船が停泊するなど、「生糸のまち」の旦那衆の娯楽も集積した。また、大正14年(1925)には、萩原朔太郎が詩「広瀬川」を収めた「純情小曲集」を出版したことで、全国に知られる場所にもなった。

しかし昭和20年(1945)8月5日、本市は大規模な空襲を受け、535人⁷が犠牲となり、市街地の約80%が焦土と化す甚大な被害を被った。その中でも特に悲惨をきわめたのが、比方根橋の北側にあった小柳町(現住吉町二丁目)の防空壕である。小柳町の防空壕は当時模範とされたため、敵機襲来とともに付近の者や通行人約30人が防空壕内に逃げ込んだ。ところが、多数の焼夷弾と爆弾によって付近は火の海となり、煙と熱気で壕内にいた全員が窒息し、その内12人が亡くなった。また、広瀬川に飛び込んで避難した人も破片弾などの直撃を受けるなどして大勢が犠牲となり、広瀬川河畔は戦争の記憶が深く刻まれる場所にもなった。

戦後、製糸業が衰退すると、広瀬川沿いの製糸工場は姿を消し、周辺のにぎわいも途絶えていった。1980年代後半には中心商店街の空洞化も手伝って河畔の人通りは激減、「生糸のまち」の痕跡も急速に失われていった。しかし、戦後復興で整備された美しい河畔景観の求



交水社の製糸工場(昭和5年)
提供：ふるさとの思い出写真集
前橋(国書刊行会)



広瀬川のかき船(昭和14年)
提供：ふるさとの思い出写真集
前橋(国書刊行会)



戦後の広瀬川遊歩道(昭和30年)



厩橋の句碑とオブジェ(昭和56年)

⁶ 広島でかき料理を提供していた屋形船を用いていたことから、通称「かき船」と呼ばれた。

⁷ 「昭和20年前橋市事務報告書」に記録されている当時の前橋市域での犠牲者数。

心力は高く、広瀬川の迫力ある流れと四季折々の緑に彩られた遊歩道は、都心部にいながらも潤いと安らぎを感じられる空間として市民に愛されるようになっていった。

製糸工場が立ち並ぶ風景に代わり、美しく整備された遊歩道の景観が市民に定着するにつれて、広瀬川河畔は再び本市のシンボルとして認識されるようになった。その最たるものが、昭和 57（1982）年に市議会発議で制定された「前橋市市民憲章」である。市民憲章の冒頭に、「わたくしたちは水と緑と詩のまち前橋の市民です」の一文が登場すると、本市は「水と緑と詩のまち」をキャッチフレーズに使用し始める。平成 5 年（1993）に市制施行 100 周年の記念事業として諏訪橋と比刀根橋の中間地点に前橋文学館を開設、入り口脇に萩原朔太郎の銅像が建立されると、広瀬川河畔は「水と緑と詩のまち」を象徴する空間として高く評価されるようになった。



前橋文学館

これ以降、市内外から広瀬川周辺の活性化を望む声が多く寄せられるようになり、これまでにさまざまなまちづくり計画が提言・立案されている。なお、平成 30（2018）年には、厩橋から久留万橋までの区間が景観条例に基づく景観形成重点地区に指定されている。

（2）関連する建造物

【シンボルとしての広瀬川河畔を構成する建造物】

①比刀根橋

比刀根橋は、昭和 8 年（1933）に竣工した鉄筋コンクリート造のアーチ橋で、アールデコ調のモダンなデザインが施された近代土木遺産となっている（出典：前橋市景観重要建造物悉皆調査・平成 26 年（2014））。橋詰の袖が川沿いに伸びているため、側面のみならず正面からの眺めもよく、令和元年（2019）に前橋市景観資産の「風景と視点場」として登録された。



比刀根橋

橋の北側の緑地はかつて防空壕があったところで、ここに避難した人々が悲惨な最期を迎えたことから、犠牲者を追悼するための「前橋市戦災被爆者平和記念碑」が建てられている。また橋には、空襲爆撃の弾痕跡が残っているとも言われ、空襲の悲劇を後世に伝える記憶遺産にもなっている。

②柳橋

親柱に大正 12 年（1923）竣工と刻まれる柳橋は、比刀根橋と同様にアールデコ調のデザインが特徴で、大正から昭和初期にかけてのデザイン史を物語る。こちらも令和元年（2019）に前橋市景観資産の「風景と視点場」として登録された。

古い写真によれば、竣工当時は鉄製の高欄であったが、現在はコンクリート製となっている。大正期に建造されたコンクリート橋としては、上流の旧石川橋（大正 4 年（1915））に続く先駆的事例であった。



柳橋

③交水堰

比刀根橋下流の川床が急傾斜している部分は「交水堰」と呼ばれ、大正時代に交水社が自社工場に水を引くために造成したことに由来する。急流で白濁する様は、朔太郎の「広瀬川白く流れたり」の一文を彷彿とさせ、広瀬川の代表的な視点場となっている。



昭和46年(1971)の交水堰との比較

【シンボルとしての広瀬川河畔の街並みを構成する建造物】

④朔太郎記念館

本市が誇る詩人・萩原朔太郎の生家は、かつて北曲輪町69番地（現在の千代田町一丁目）にあったが、没後、敷地内の建物が順次市内の敷島公園ばら園内に移設され、朔太郎記念館として一般公開されていた。その後、平成26年(2014)に提出された「前橋市歴史文化遺産活用委員会提言書」の中で、朔太郎記念館の広瀬川河畔への再移築が提言されたことを受け、平成29年(2017)に現在地へ移築復元して現在に至る。



朔太郎記念館

ア 土蔵

明治34年(1901)頃の建物とみられる。前橋空襲の戦火を免れ、ここに保存されていたノートや原稿、朔太郎宛の書簡など多くの資料が残されることとなった。



書斎

イ 書斎

生家の裏庭にあった味噌蔵を改造したもので、内部は、当時としては先進的な「セセッション式(西洋の建築工芸上の一様式)」に統一されている。これらは朔太郎自身の考案によるもので、「月に吠える」や「青猫」などの多くの作品がこの書斎から生まれた。



土蔵

ウ 離れ座敷

明治25年(1892)頃、父・密蔵によって建てられたとみられ、主に来客の接待に使用された。朔太郎が生家に住んでいた頃、北原白秋や若山牧水、室生犀星などが訪れ、この部屋に通されたという。



離れ座敷

⑤愛宕神社

I-3-(2)-②③を参照

⑥^{ひろ}瀬川美術館（旧^{ひろ}近藤嘉男アトリエ及び^{びん}絵画教室ラ・ボンヌ）

広瀬川美術館は、昭和 23 年（1948）に画家・近藤嘉男が自宅兼アトリエとして建設した建物で、子供絵画教室「ラ・ボンヌ」及び大人絵画教室「生活造形実験室」を併設した。没後、美術館としての補修・改築が行われ、平成 9 年（1997）に開館した。

外観はインターナショナルスタイルを意識した形で、正面の大きな窓は外部への開放性を備え、アトリエらしい工夫が伺える。ノスタルジックな空間の中、現在は美術品の企画展示やコンサート会場として活用されている。戦後の建造物としては全国で初めて、国の登録有形文化財（平成 11 年（1999））となった。



広瀬川美術館

（3）歴史と伝統を反映した人々の活動と周辺の市街地環境

①前橋空襲の慰霊と継承

前述のとおり、昭和 20 年（1945）の前橋空襲では、比刀根橋近くの防空壕に逃げ込んだ人々が悲惨な最期を遂げたことから、周辺は戦争の悲惨さを語り継ぐうえで象徴的な場所となり、慰霊と継承の活動が行われるようになった。

その発端は、「前橋市戦災被爆者遺族会（以後、遺族会）」による活動である。遺族会は、犠牲者を慰霊し戦争の痛みを後世に継承していくため、前橋空襲で家族を亡くした人々により昭和 41 年（1966）に発足した団体で（出典：広報まえばし）、毎年空襲の日に慰霊祭を執り行うことが恒例であった。慰霊祭は、はじめに妙安寺で慰霊法要を行い、その後、防空壕跡地にある前橋市戦災被爆者平和記念碑（平和記念碑）を参拝するもので、昭和 62 年（1987）の広報まえばしによれば、当時、100 人以上の遺族が慰霊祭に参加していたようである。なお、平和記念碑は、昭和 51 年（1976）に遺族会によって建立されたものである。



戦災被爆者平和記念碑



自治会主催の慰霊祭の様子

遺族会は終戦から約 50 年間活動を続けていたが、会員の高齢化のために平成 7 年（1995）をもって解散を余儀なくされた。慰霊祭は一旦休止となったが、「前橋空襲を人々の記憶から消滅させないように」との思いから、休止期間中も地元有志と空襲体験者による「前橋空襲を語る会」が行われていた。その後、平成 17 年（2005）に地元の住吉町二丁目自治会が慰霊祭と周辺の環境整備を引き継ぐこととなり、以来、毎年 8 月 5 日は、平和記念碑前に設置された祭壇に献花と祈りが捧げられ、地元の小学生が声を合わせて「平和の誓い」を読み上げる光景が見られるようになった。また、平和記念碑には、普段からたくさんの千羽鶴が供えられているが、これらは地域住民をはじめとする多くの市民（病院や企業などの有志）によって創作されたものである。住吉町二丁目自治会では毎月、周辺の愛護活動を行っており、花の手入れや草刈り、清掃を欠かさない。そのおかげで、平和記念碑周辺はいつも美しく、戦没者の追悼と平和への願いが顕在化された場所となった。これらの活動により、平和記念碑を中心に比刀根橋周辺は前橋空襲を今に伝えるシンボルとなり、その悲惨な歴史を語り継ぐうえで欠かすことができない。

このほか、住吉町二丁目自治会では平成 24 年（2012）から遊休市有施設を活用して「あたご歴史資料館」を運営していた。建物の老朽化や担当者の高齢化等の理由により、令和 2 年（2020）3 月に閉館となったが、館内では戦時中の写真、衣服や物品等が展示され、その多くは回覧板での呼びかけにより住民から提供されたものであった。資料展示に加えて、近隣の学校や NPO 法人与連携し若い世代向けの平和教育活動を実施するなど、資料館は戦争の悲惨さを地域に伝える大きな役割を果たしていた。その資料館で収蔵していた資料は、前橋市へと引き継がれ、現在新たな資料館構想を検討している。

こうした市民の地道な取り組みが機運となり、平成 28 年（2016）から市主催による「前橋空襲一斉慰霊」が行われるようになった。市主催の慰霊祭は元々、戦後すぐの昭和 20 年（1945）に龍海院（紅雲町二丁目）を会場に開催されたが、GHQ の進駐等の事情により、それ以来行われてこなかった。そうした中、当時、前橋市歴史文化遺産活用委員会の委員であった市内の神社・寺院・教会の代表らが市民に呼びかけ、信仰・立場などを越えた一斉慰霊を行うと共に、本市の歴史を学んだ市民が前橋空襲を語り継ぐ新たな形の慰霊行事が始まったのである。遺族会から住吉町二丁目自治会へと継承された戦災慰霊の取り組みはいまや中心市街地全体へと広がり、8 月 5 日は市内の至る所で平和への祈りが捧げられている。

作成中

②地域住民による美しい河畔づくり

戦後、本市の製糸業はすでに衰退期に向かっていたため、かつて川沿いに建ち並んだ工場や座（芝居小屋）、料亭などは徐々に姿を消していったが、戦後復興で整備された遊歩道や広瀬川美術館のようなモダンな建造物、柳や桜の植樹によって、広瀬川に美しい河畔景観がもたら



川の清掃活動（昭和 42 年）



緑の少年団の活動

されることとなった。このことにより、それまで産業用途のイメージが強かった広瀬川が住民に身近な存在へと変わりはじめ、その後住民による美しい河畔づくりの活動が活発になり始めた。

広瀬川河畔の美観活動が始まった明確な時期は不詳であるが、昭和 39 年（1964）と同 42 年（1967）の「広報まえばし」にて、市民による花の植栽や川の清掃の様子が特集されているほか、近隣住民らが地域の公共用地の維持管理に取り組む「愛護会」（現在の公園愛護会）が、昭和 43 年（1968）以前に設立されていることから、少なくとも昭和 40 年代前半には始まっていたと考えられる。その後、公園愛護会に加え、昭和 60 年（1985）には地域の児童生徒らが主体となって活動する「広瀬川河畔緑の少年団」も結成されている。

現在も、愛護会では 4 月から 12 月までの期間中、遊歩道のある柳橋から久留万橋にかけて約 30 人

が集まり、定期的に清掃活動を行っている。広瀬川河畔緑の少年団は、定期的なごみ拾いや落ち葉拾いのほか、花植えや小鳥の巣箱づくり、冬場の断水時期の川底探検など多様な活動を行っており、参加する子供たちは活動を通して地域への愛着を深めている。こうした団体による活動のほか、広瀬川河畔沿いに住む住民が庭先のプランターの手入れをしている様子も良く見られ、地域全体で美しい河畔づくりに取り組んでいる様子が伺える。こうして美観が維持された広瀬川河畔は、いつしか「水と緑と詩のまち」を象徴する場所として認識されるようになった。

作成中

なお、平成 30 年（2018）には広瀬川河畔のうち厩橋から久留万橋までの区間が、前橋市景観条例に基づく景観形成重点地区に指定された。指定に至るまでの約 7 年間でワークショップが 5 回、「広瀬川デザイン協議会」が 11 回開催され、地域住民・学識経験者・市の三者で意見を交えながら、景観や屋外広告物に関するルールづくりを行った。景観形成地区指定後は、地元自治会の代表者や権利者を中心とする「広瀬川河畔地区まちなみ景観協議会」が新たに組織され、地区の美しい景観づくりのため、随時市との情報交換を行っている。



③「詩のまち」のイメージづくり

前橋市民にとって、今や広瀬川＝詩のイメージが定着しているが、このイメージを形づくったのは「萩原朔太郎研究会(以下、研究会)」の活動によるところが大きい。萩原朔太郎研究会は、朔太郎の調査研究・普及啓蒙を目的として昭和 35 年（1960）に発足した団体で、詩人・萩原朔太郎の国内外の研究者・愛好者で構成される。



朔太郎像

同研究会は、活動の一環として、昭和 45 年（1970）に朔太郎作「広瀬川」の詩碑を広瀬川河畔に建立した。



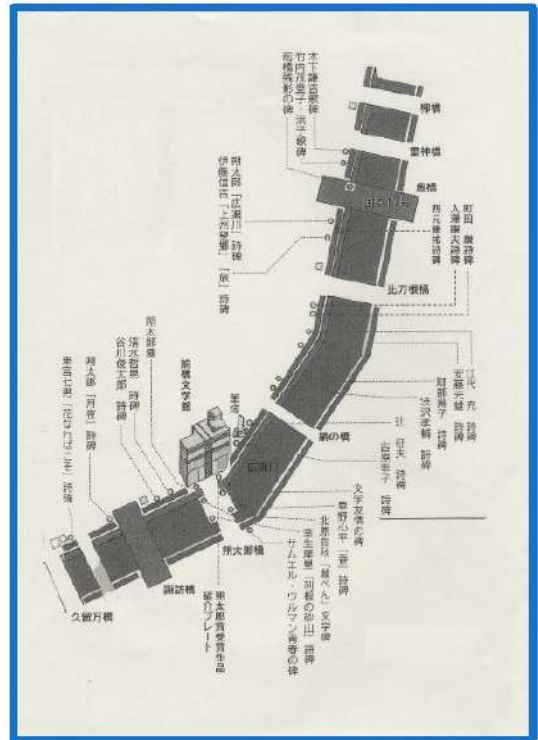
「広瀬川」の詩碑

廣瀬川
廣瀬川 白く流れたり
時さればみな幻想は消えゆかん。
われの生涯を釣らんとして
過去の日川邊に糸をたれしが
ああかの幸福は遠きにすぎさり
ちひさき魚は眼にもとまらぬ。

戦後復興で整備された美しい河畔景観は詩との親和性が高く、詩碑の設置は多くの市民に支持され、それ以降、「詩のまち」をイメージさせる活動が官民を挙げて行われるようになった。現在では、朔太郎のみならず、本市にゆかりのある詩人や、平成5年（1993）に創設された現代詩の文学賞「萩原朔太郎賞」の受賞者などの詩碑も設置され、その数は20基を超える。

継続的に行われてきた詩碑の設置は、平成16年（2004）を最後にしばらく行われていないが、そこから派生した活動として、平成5年（1993）から研究会と「前橋文学館友の会」が中心となって「詩碑巡り」のガイド活動を開始し、詩碑を巡って散策する人々が見られるようになった。

こうして、いまや広瀬川には「詩」のイメージが定着し、「詩のまち」のシンボルとも言える空間となった。また、研究会による詩碑の建立活動は、前述の萩原朔太郎賞の創設や詩碑巡りをはじめ、「朔太郎音楽祭（平成18年（2006）～）」、「朔太郎記念館の移築（平成29年（2017））」の呼び水となり、現在も官民を挙げた「詩のまち」のイメージづくりが続けられている。



広瀬川河畔の詩碑マップ

（4）まとめ

広瀬川が近代前橋の歩みを象徴する場所として捉えられるようになったのは、各時代の人々が広瀬川河畔を舞台に活動を展開し、現代までそれを受け継いできたからに他ならない。こうした歴史が蓄積され、いつしか広瀬川は前橋の様々な側面を総合的に表すシンボルとして捉えられるようになった。

例えば、前橋空襲を経験した人やその経験談に耳を傾けたことがある人々にとって、広瀬川は戦争の悲劇を語る畏愛の場所である。一方、市内のあちこちに製糸工場と煙突が林立した時期を知る人々は、広瀬川を「生糸のまち」の象徴であると言い、それ以降の世代の人々は、広瀬川を「水と緑と詩のまち」をイメージさせる空間であると表現する。このように、広瀬川に対する印象はそれぞれの世代で異なるが、いずれも「近代前橋の歩み」を投影した見方をしており、どの世代も広瀬川の河畔景観に歴史性を感じていることを示している。

広瀬川の印象を表す各キーワードは、いずれも「前橋らしさ」の源泉となる概念であり、広瀬川は「前橋らしさ」の原風景であると言えることができる。つまり、広瀬川における歴史的風致を維持向上することは、「前橋らしさ」を磨くことと同じ意味なのである。

1-3 シンボルとしての広瀬川河畔にみる歴史的風致の広がり

作成中

【歴まちコラム・「生糸のまち」の記憶をとどめる活動】

製糸業の衰退に伴い、河畔近くにあった製糸工場は次々と姿を消していったが、せめて往時の姿を後世に伝えようと、「生糸のまち」の記憶をとどめる活動が行われるようになった。

- 厩橋／広瀬川に架かる国道 17 号（厩橋）には、欄干に生糸を巻き取る「大柁」がデザインされている。橋のたもとの碑には、「前橋残影の句」とともに座繰をする女性が描かれ、その脇には繭玉をモチーフとしたオブジェが設置されている。これらは、市と蚕糸関係団体によって昭和 56 年（1981）に建てられた。



前橋残影の句

- 絹の橋／比刀根橋と朔太郎橋の間には、交水社の従業員が対岸に渡れるように架けられた無名の人道橋があった。平成 8 年（1996）の改修の際、この橋を「絹の橋」と命名し、手すりは生糸をモチーフとするデザインとした。



絹の橋

- 撚糸工場／繊維業の業態の一つに撚糸業があるが、本市では製糸工場とともに撚糸工場も多く稼働していた。広瀬川沿いには今も旧撚糸工場建物が点在していることから、平成 27 年（2015）から「蚕糸業に係る歴史的建造物群等調査」に取り組んでいる。

撚糸工場建物

- まちづくり計画／広瀬川河畔の活性化に向けて、各種のまちづくり計画が官民を問わず盛んに立案されてきた。中でも平成 26 年（2014）の「広瀬川テラス構想」は、前橋商工会議所を中心とする民間団体が策定したもので、「生糸のまち」や「朔太郎」といった歴史文化を生かした河畔整備が提案されている。

I 「関東の華」から「生糸のまち」への変遷にみる歴史的風致の広がり

作成中